釋迦御一代記圖會

二

第二号

へ13
4039
2

釋迦御一代圖會卷之二

目録

著闇診脉摩耶勸墮胎藥
老翁相摩耶説胎内皇子高德
相者們討論摩耶夫人容體圖
摩耶夫人夢裡聽十恩説
盞毘尼園催花宴
悉達太子降誕現天地瑞異 同圖
摩耶夫人逝去
悉達太子入學阿私陀仙示三十二相

昭和42年12月12日 和田大作氏贈
0 42 8649

へ13
4039
2

悉達太子与提婆挿藝
悉達太子与諸童子挿射術圖
提婆与瓶陀角觝圖
淨居佛一試悉達太子
提婆太子擊大象圖
淨居佛二試悉達太子
悉達太子娶耶輸陀羅女
悉達太子与達婆太子闘馬術圖

釋迦御一代圖會卷之二

浪華　好古堂野亭考選

著闍診脉摩耶勸墮胎藥

淨飯王八摩耶夫人懷妊有ーより白王子の誕生を待ちと一日三秋の思をなー
ち十ヵ月三年を経ども降誕の沙汰なくれを酷ぐ睿慮を煩ひ群臣が聚て
評議あり此支如何あらんと問ふ三太臣ちゝめ月卿雲客冠を傾け互に疾
しゐ。議論區々ゆく古今の例を考ふ。胎孕三年ゆゑ先蹤を実されを
見ハ疑らくハ病府の所為なるべーそ衆議一致ー。其旨啓奏ーれ淨飯王も
始正ーゆ夢の告ハ子ひりゆゑ凝暗鬼を生ぜるなるべし。諸臣の約ゆ御心迷ひ
歩ーぐ四天下ゆ名を得ー典藥官代呂寧病根を推究めーら速ゆ治ーべ良劑と
調ど夫人ゆ勸めるよ勅捷ある見ゆ依ーく遍く百國ゆ觸渡ー。摩耶夫人の病源
代脉察ぜ良医を尋ぬ茲ゆ千淨國の医官ゆ著闍と云る者あり幼女
医術を好ま普く名医ゆ從ひ学ひ四百四病の治法知ざる事なく死を起ー生

四方の妙術ありて一度脉を診て其病根を察せざることなし。又財宝を貪るの一癖あり。浄飯王の医耆婆を召して吏戎宮に大いに怡び吾迦毘羅城に至り摩耶夫人の患病を療じ莫大の恩賞を得んと募り憑りて摩伽陀國へ上り鳩曇彌夫人の附人馬将軍八旧織なれば先月景城へ至り馬将軍に対面し召し憑じて上り一旨を告ぐるに馬将軍暗に悦び人を拂い著闍に謂て曰く摩耶夫人実は妊娠なれども出産遅々にして患病の所為なるべく諸國の名醫を召されども卿に勝る者はなし。何卒夫人を診脉せば妊娠の吏を抑隠し患病なりと告げ密に堕胎の薬を勧め胎子と血水とを一得させよ。恩賞は任せんと頼むぞ。素り貪慾の著闍なれば一議に及ばず是を肯い別を告ぐ。朝廷へ出るに早諸列より召し憑じて上り聚る医官百人紆拘結居して星光臣諸医官を聽中に列坐させて医術の理を討論せしめ其能不能を試し給ふに維有て著闍が右に出る者なかりければ星光臣諸医官を天下の良医なりと。其旨奏聞を浄飯王に

申し上げ摩耶夫人の患病を著闍に療じ給へと。著闍は摩耶夫人の容躰を窺ひ胎子の患病を看定めて若懐妊なれば安産なれば良薬を勧め亦病病なれば速に平愈なれば良方を配剤せよと倫言ある。著闍敬て勅命を奉り心裡に仕たり顔にて摩耶夫人の懐妊是を振り成弁じ給ふ。面渇に王命のおもむきを述べ給へば鳥将軍は夫人の懐妊是を振り成弁じ給ふ。夫折られば甚だ怡び労を謝して憑み諸夫人に見へ王命のおもむきを告げ給ふ。夫八箇月の心中に想ひ給へ。過ぎる夜正しく夢想の告げ給ふ上、妊娠なる吏疑なくの御ふ。陰産の御ふ吏は渠道師が呪詛の所為なり。心長く降誕の期を待よと示し給へ。仮令勅命なれども妄に医薬を服し若胎内の皇子に過ち有て悔るも及ばず。是は如何とせんと身独胸を痛め給へば鳥将軍に向く。船は妊娠尋常に易り。已に三年成り給へども降誕なく帝紙に雖も患病乃ち思ひ煩ひ給へ。船は皇子を孕まれて成定に知り給へ。今吏医師

お委ねぐるかおらむ。明日べく田巻して医師を問へと仰せ。烏将軍推及して仰せ
さる吏おいへども。渠著閣が告ハ御懐妊なるべく速に御平産あるべく良薬を勧め若患
病かるべく傾御平愈有べく医療をなすべきの吏おいて二度診脈させおい其
医案式を以て其上御意に合ハぬ調薬を服用ゆまじ。何なりゆ勅命成奉り
く参ア者を空しく回しおくを違勅の恐れおいなどと練るおより。夫人已吏を得
ぬ。さらば左も右もと絡あ烏将軍傾く著閣を夫人の座前招き猶く脈案を
まりいて命をるおそ著閣畏り敬て夫人お尺尺容躰を窺ひ診脈とるお正お胎妊
ゆ。この違勅の馬将軍が紙と以吏を患病とい生産胎せ。むる時ハ朝廷の恩賞と
馬将軍が賞禄と両方吏を得一時お富貴を極めんと肚裡お思惟。佯と眉を
顰め恐ある吏なり。夫人の御胎内懐妊なると吏悪血凝結ぐ血塊
と成り累年お増長して今ハ已お胎ゆ如く吏錯ぐ難治の症なりされども吾が家お
希代の良方あれば調剤して奉るべし。一七日の間点ぐを服用しゆべ不日お御平愈

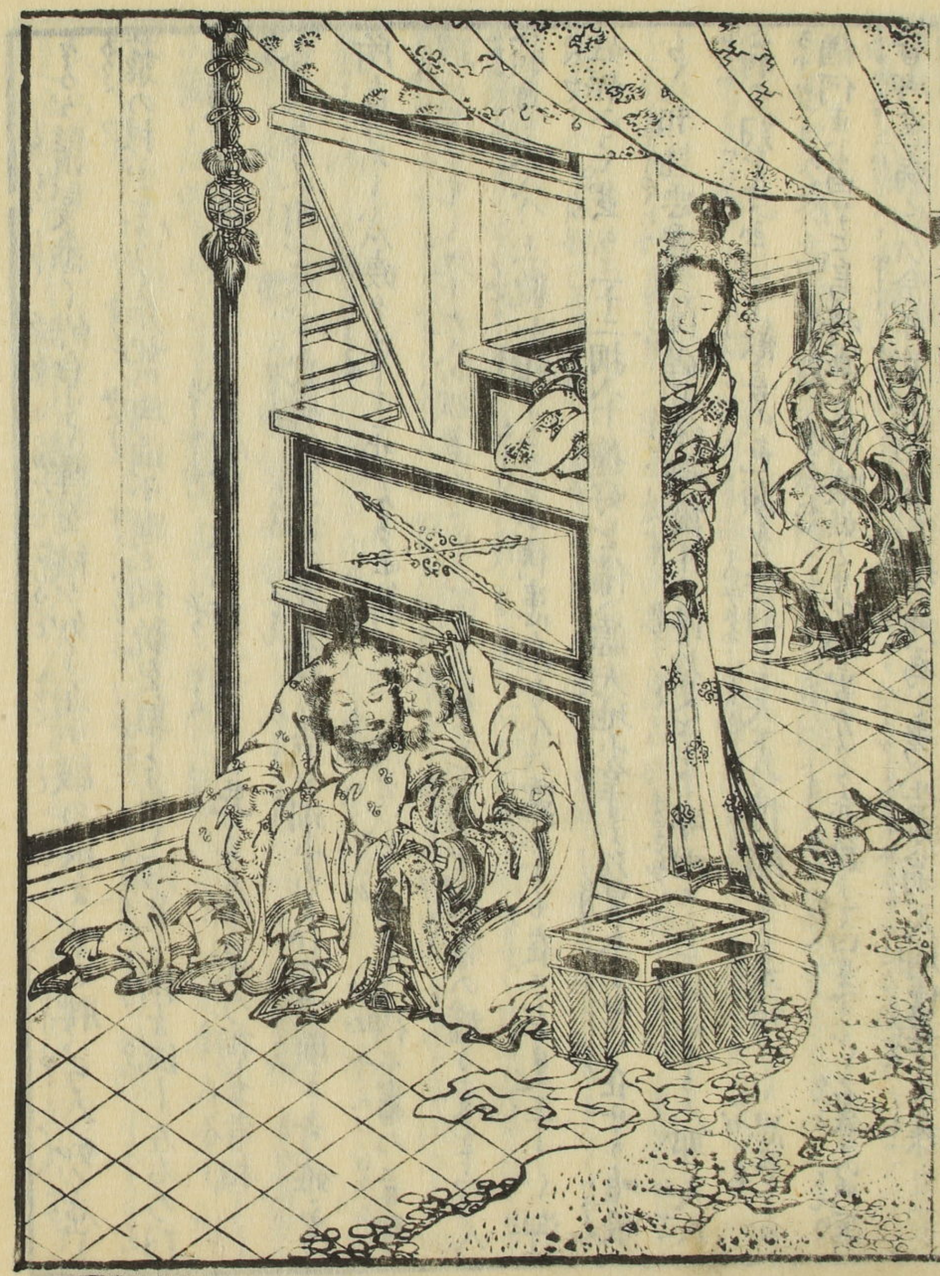
ちて却ぐと紛巧おぞ中るる。夫人此ゆ又一層の憂を増心裡お思ひ煩く此の医
道お精くぐ船が懐妊を察せぐ。患病とい医案甚ぐ中らぐ若恒ぐ調薬を
服せぐ。胎内の皇子を害ぐ。並ぐる王命お依て来る典薬の薬を服せぐと云ぐ
違勅の外を為むり。吏ハ何ともぐ思ひ猶豫流吟て為ぐ中ると烏将軍早く
其色を悟り。著閣お向ハ良医已お診脈して病の所為とやるべく上ハ宜く七を下
しぬ。吾時ぐお吏を進ぐ人と云ぐれど著閣領掌して薩薬を調合。偖烏将
軍お謂て曰今日殿中お諸道より召お徳ぐて終り聚りたる医官が医道の二編
奥を紐綸とるお悉く精医お して医乃秘決を知者ぐ。敢て五ぐ此調薬式見せ。
吏ゆ生。見せむ。已が知ぐる吏を推裏調薬乃可否を編ぐ自ら夫人乃疑念を
引出。徹底ぐ良剤。却て勅を奏ぐる吏なる事と雖ぐ必吏造弘乃
毒薬なる吏を吏て是ぐ烏将軍吏ぐて平信平疑ぐ心お思
旨あるぐ。俄と承引せ。休みて著閣を問。其后平日お動仕ぐる典医を招寄て

著閣が調藥を鑒行せしむるに此輩の著閣が大名に怕せしに其藥法是何の生剤
なる解せざれども著閣が含ずれば定めし深き医案なりと臆断し実に后妃の御容
躰小宮に妊娠と思ひしに血塊と云ふ人草見やすい此藥法最も妙なる者なりかくて
烏將軍に此者の杜撰と云ふを偖公著閣が医案必的せりと心を安んじ夫人に其由を
言上し服用しむ久しを動む夫人を秘しり服藥もべき言なれども唯淨飯王の睿慮
を安んぜん為ぞうに脉案を行せしに渠已に懷妊あるべきを以て此者の調藥服
すべきを心に忌藥湯を用る躰を見て晴に後園に捨させ更に依著閣が巧針に
画餅となり落胎の汝沈もなく増て降延の気に病ちうを彼藥湯を日々に
後園に捨らるる其余流園中にながれ入植なるべき草花是が為に枯萎ぞ怕れ
婦女に初りてど心著ぞやうに果に覚り夫人に斯と告るに后妃殘なるべきを初
より姙と思し支よりて愈身を慎を他の医官に調ぜ藥とも敢て用ひずもど
ふ〳〵流まにぞ捨さられる

老翁捫夫人奏胎中皇子高德

朝廷に日々に月郎夫人の容躰を紡ぎ更に病も愈ぞ降延も
なれば淨飯王睿慮を悩ませ玉ひ群臣を召聚て詮議あり已に医藥効を奏
せざる上百針盡て此上は四天下に觸て観相に堪能なる者を擇出し夫人を相
させ患病の姙娠を定めしめよと宣旨ある諸大臣王命を畏り諸國へ紹命を傳へ
相者を召るに者相に名を得し輩年来の琢磨を顕すは此時なりと我もと召に
應じて迦毘羅城へ参り集る者已に百人余りなれども淨飯王此に睿慮あり恭くも堂上
へ諸相者を召て侍臣を以て紹あるに八人耶夫人の胎中真の孕る患病の所為ら
精く看相せよ然見究めて人者に若干の荘園賜下しとの御使なり相者一奇
に拝伏し王命を領掌して官使と倶に青陽城の宮中に至る官使は烏將軍に對面し
云々の旨通達しれば烏將軍後宮に入て夫人に斯と言上せる后妃亦憂に入給て
深閨に引籠り年久く休浴せざる流らを絞るに涙くの相者に見人更に

此吏のゝハ勅許を願いて辞ず烏将軍豈て仰さる吏ホいへども大王御身の上を案し頃毎ゆゑ或ハ高徳の験者ホ祈禱させ或ハ諸國ホ名医を需ム今亦天下ホ名ざゝる相者を召聚ゆゑ帝恩ゆゑ爾ホ御身を愛幸しまゝ帝恩なり然るを待ゑまホ違勅の科を免まゝ玉ハゞ何吏も君の御為御身の為と思召相者ホ見へゝ夫婦言交畫して練々ホゞ后妃已吏を得ざ然ゝ玉殿ホ立出帳を垂く相者を一人ハ召入て観相させゆゑ是ホ依て百人の相者ゝ后妃の御前ホ出く其玉貌を相しまるホ天の方せる美人ゝ久ゝ御悩ホ消面痩ゆゑ素雪の肌あざやホ桃李の面慶こと譬ホ物なく后妃の顔ホ向ゝの者其國色ホ眼を奪れ恍惚ゝ醉るが如く痴なるが如く吏ホ懐妊ゝ病痾ゝ見分ゝるゝ思返ゝ熟看相し烏将軍ホ對ゝ后妃を相しまるホ妊娠の表ハ必定疾病の所為ゆゑハ速ゝと告始ハ人ゝ九十九人ゝ大同小異ゝ皆妊娠ホ疑是血病なり但ゝ妖邪の障碍ありなんと云ゝるホ唯百人目ホ一人の老翁ありゝ髪鬚髪悉く皓白ホく雪を被が如く面ホ皺の波をさゝ腰ハ弓の如く屈し藜の杖ホをゝて后妃の御前ホ進ゝ相貌を熟と見く潸然と泪を流し左右の列も畏せゝ咤ひ今ゝ烏将軍大ホ驚り怪て曰先ゝ九十九人の相者看相しゝ各其ゝ所を述るホ翁一人左右の考文状の告ゝ泪ホのゝむせぶハ頗る奇姫なり所存の有ゝ或疾々告ゝと叱ゝるホ翁ゝふゝく泪を拭て云るゝ御不審の旨御理ホいゝ去ゝ九十九人の相者ゝ玉顔を窺ゝ馬ゝ鑑竜の蟠る吏を知ん翁尊夫人ゝ玉貌を相しまるホ御患病なんハ露ゝも在さゝ見正ゝく御妊娠ホく然も三十二相八十種好を備へ德天地ホ等ゝ皇太子ホく在せり唯恨らくハ邪魅悪霊の障碍ホ依御延生の遅怪吏ゝ亦雨そゝ泣ホるゝ耶夫人翁の幻を見ホいく歓喜の色顕ゝ此翁ゝを天下の博識ゝ最嬉ゝく思召ども猶何吏ホ曰ハゞ烏将軍も御懐妊と雖て心男なゝ亦難ゝて曰見まゝく名誉の典医皆御患病ゝ今亦妻くの相者も病の所為と考へ告ホ翁一人御懐妊と雖ホ三十



醫官等
牽耶夫人の
容體を討論
圖

三相八十種好具足せり皇太子とゝかゝ繼跡あるべと問ふ翁答て曰老夫不敏なれども后妃を觀相せハ天聞通とゝく普通の相者の窺ざる秘法なり九曜七曜廿八宿十干十二支三十六禽の星を配當し天地二門を勘考し五龍七道五陰七儀五位七德を分て四神相應の理を考へ六明大有三貨十二運を配列して陰陽男女の位を見定めて拳を挙し大地八撃をゞしるも考文鄭玄違ハゞと曰烏將軍亦曰汝左程看相を達し皇太子胎妊ゑと見定むる上八上二人より下萬民まゞの幸福なれば慶賀をこゝゝ

なれ共却て忌しく涙を催さハ是如何と答む翁亦曰さんに下官老さゝれく忍むと

もれど甲斐なく貴人の御前なれく不吉の涙を流しハ恐ても猶余り有並なれば其理を

言上まゝ人前ゝ如く尊夫人の胎内ゝ孕せゝハ王乃如皇太子なれく刀劍火の

上ゝ座落しなれども敢て御命ゝ障なく降延しなれば笑ても四天下ゝ王として轉輪王

乃位を踐ゝ太子ゝあゝ必ず出家学道して妙覚無為の法位ゝ昇り一切種智を成

清淨法輪を轉じ天人俱ゝ利益をこゝむる五百の大國三千乃中國無量の粟散國乃

一切衆生を濟度し諸願を滿しめゝ法王如来と成ゝ皇子ゝて出世せゝ

下官ハ老年積りて九十余旬翠黛もちぬ身ゝて皇太子の学道成就し一切衆生

を化度しゝ結縁ゝ洩人吏の悲しきゝ覚ず落涙して亦泪ゝそゝれゝ

夫人大ゝ感歎まく実り相せ翁ゝ今汝が幻を見て躯が胸中風ゝ雲霧乃散

しが如し烏將軍翁ゝ被物を与へ俱ゝ王宮へ參て考文のあむ旨を奏せと曰帳内深

く入まゝ烏將軍承り數多の金銀絹帛を取出て与れども翁袖を拂く一物とも

受ず再三勧まゝも猶固く辞しなれば為方なく翁を伴く王宮へ參り翁が勘文の旨

を具ゝ啓奏しなれば淨飯王一度怡び一度ハ憂ひ其怡び憂ゝ所以ハ后妃の懐妊実

以ハ出生の皇子十善萬乗の宝位を望み玉ふ出家学道して人天の吏なり給ふ

百人の中ゝ唯一人妊娠なりと見定まゝ吏未曾有の相者なりて睿感斜ならず乃

莊園を与行人と宣旨あまたゝ羽猶も固く御辞退申上杖を曳て退出しなゝ其後

王命に依て官人們其踪跡を尋ぬるに絶て行方を知者もなしと

摩耶夫人夢裡聽十息說

日月の傳らざる吏絃を放まゝ奔竿前の如く山を下る流水に似たり早如月も過弥生に
暮し巳に卯月になるに朔日の夜摩耶夫人閒眠に夢の裡に以前顯まし玉太
子。赤胎内を出て出玉ひ后妃の枕頭に佇る居玉へ以前に見玉へしより長延勝り瑠璃
の御髻に肩を過微妙の御声にて母夫人と呼覺し玉へ夫人夢心に起上りあひ玉ひて又
愛さく覺玉へ太子夫人に對て宣ふ。憍曇彌夫人の悪念消滅の期来まし丸ば降誕の
日遠からじと明日より七日の間能々御身を敬ひ給へ。一時の嗔恚に俱胝劫の善根を焼
捨給ふ吏なれ。そは十拇無漏の大海に嗔怒の浪を吏なく。瑠璃真如の月前横障の
雲覆ことなし。抑九宿世の因縁に依て后妃の胎内を借る母の十息叛ざる期有べ
くもあらず恐ある吏なりと宣夫人夢心に是を勿躰に仰ぎ凡躰不淨の身に
紀御佛を宿し進らる吏此身の歡何吏ぞ是に過ぐべき今宣ふ母の十息

とは如何なる吏を申ふ。願くは説給へと問玉へ太子點首て曰く。第一は懷胎五箇の恩と
以て。孕より公来十月の間の苦悩居起も心に任せと仮初の物の卿音に後れ蛩なく。心
の休まるあらじ。二に飲食禁忌の恩。孕てより五味の味ひを失ひ朝夕食を其あ公を適
欲する食味あるも禁毒を怕て敢て食せず。三に臨産受苦の恩。産の気萠
て腰痛五臓を裂ぐ如く。寒は熱の苦患とする。爭ぞ是に勝ん。四に生死安産の
恩。産に臨て汚穢不淨の物も厭ひ給ず。出生の児の五躰具足せん吏を耳に聞
五に初声聞夢の恩。已降産て心遠く魂消夢に夢見る如く。手に羊生の間に一度初
声耳に入む。我身の先生を忘れ愛憐の心弥増健に成長せん吏を願其慈悲心何を以
て謝ぞ。六に養育覆衣の恩。初衣を始として寒暑の衣服に心を尽す。冬は温に裏
涼く。春の日長くとゝ人も花を愛ぶ。乳房を含め夏の夜短くとゝ人も緒虫を愛ひて
夢も結ぶ。七に親疎朋友の恩。稍成長して他の小児と矢り遊ぶに。吾が子は他人の子に
他人の子も食物を分ち与へ游戯の具を備へ其機嫌を量る。是子成れり一息の余也

八ハ遠路遊行ノ恩偖成長て遠國他境へ往ケレハ其身ハ家ヲ面ハれ心ハ倶ニ我
ノ子の行方を尋ひ家路ヲ回る時すぐハ胸を休むるひまもなく九ヶ月ハ盧悪敵覆ノ
恩我ノ子ヲ罪を犯せ他人ノ見ん事ハ十ヶ月ハ及ヒ又ハ覆ひ隠し或ハ其罪と
身ヲ蒙り時々ヲ練り正ヲ其労苦諭ん方なし十ヶ月ハ寿命因縁ノ恩我ノ子疾病
おろかれハ天ヲ祈り地ヲ禱り薬餌ノ為ニ心身を労し甚しきに至ては我ノ命ヲ代ん
ヲ願ハ以上ハ慈母の十恩といへ共ハ天子より下ハ民家の末まで身ヲ清さる者ハ
侍ル仮令雪中ヲ肉をさし氷上ヲ骨を削るも我身一代ヲ以て爭ノ此大恩ヲ報ず
ること難得ケれ增て況や九ヶ月三年ノ間胎内ヲ中ノ艱難ノ憂ハ世ノ深恩千
劫万劫徑ルとも敢て報ずること宜ヲ。摩耶夫人身ヲひしくと思おもうまひ
我ノ母君ヲ恩を無量の苦悩を結船を産ヲひ人を唯しきふん捨ちまうしの勿躰
なきよと思召ヲ。胸ヲ塞り不覚涙ヲ流ヲ太子ハ頻ニ其心を知覚ヒまひ。如
何や母夫人過ヲ一度を悔をまひを人間ノ齢を天上ノ寿ヲ以て幻夢の如し

唯無為無漏ノ樂こそ真ノ中の真ヲ。抜ぬ契ヲ侍ル。親と子ノ子と産れ衆
生の願を充ん事を無上大利ノ功徳ノ頓て母君ヲ御父浄飯大王ヲ對面
ヲ。ま〻ん人夷の嬉しや。と后妃ヲひしと抱者ヲ。夫人ヲまと抱ヲ嬉しや若宮
延生ヒまへ。先烏將軍夫婦ヲ人せく悦ぶ。と掻起ヲて繽ヲ蹶ル仆ヲ
思召ヲ。悩ヲ遂て御夢ハ覚ヲ后妃世ヲて掌の玉を失ひる心地ヒまひ
倩夢ノ告ケ其ヲ聞ケ太子延生遠ルヲ夷を知召ヲ七日ノ間重ル慎と
曰ひ夷を心ヲ。翌ル朝より身を浄ヲ斎て六波羅密を修ヒまへ人ノ眼ヲ人ノ
もとひ。天人ノ耶夫人ノ左右へ天降リ。諸ノ飲食を捧て供養ヒまひ

藍毘尼園催花宴

斯て卯月五日ヲ至リ。浄飯王朝廷ヲ出御ヒて。禹機ノ政を少ヲ所ヲ月郷ノ中より
瓶子ヲ無憂樹ノ花を折て南上ル。浄飯王ひくと入ヲ実麗ル花ノ色
ヲ。朕ノ園藍毘尼苑ヲ此無憂樹ヲ。毎年ヲ盛ノ頃を花ノ宴をなし君臣楽

我しかふせ〜ゐ广耶夫人妊娠して より。二年三年此事を忌り給ふ。それ人花の艶なを見る時ハ憂愁を忘れ歡を生ず。朕此程を朝政違ひ。冬〜摩耶ゐ對面せと来るハ日ゐ。盤毘尼苑ゐく花乃宴を催し。广耶ゐ心を慰ん思ひ。不知夫人肯するや否やと尋ねられと。紹ある。近臣王命を奉り。直ゐ青陽城へ至り。烏將軍ゐ就て宣旨のおりむ旨を傳れば。夫人大ゐ怡びゐ。先夜夢の告ゐ遠く母夫人と共ゐ御又淨飯王ゐ對面し。もち。全。胎内の皇子の宣ひハ此折なりとて。慎ぎ領掌の旨と申奏し。勅使を回りて斯と奏聞し。れば。月景破利遮那吒那里乃三宮も。先後宮乃女官月卿雲客へ當八日盤毘尼苑ゐく花乃宴を催さんとあつ。各参集もぐれ由解ら〜。彼園中乃借瀧殿を莊嚴し。其設をなさと。勅掟ある。臣下奉り緒宮妃緒臣下へ勅命をつゝ。俄ゐ盤毘尼苑を灑掃し。清瀧殿を修理し。莊嚴を飾る事〜御華の營をなと。程なく八日ゐ成れば。先十萬乃四兵を以て。四方と清獲せ。亦一千人乃綵女容顔端正ゐして。老と女〜ねず知勝れる者を擇ぶ。五色の衣を著せ〜管侍乃役〜。亦一千の顔色美麗乃童女。年齢奇〜。身材長短ゐき擇ぶ。瓔珞彩衣を著せ。香華を執し。淨飯王ハ王冠を戴れ鸞鳳乃御衣を穿ち。七宝の車ゐ乗し。月卿雲客前隨後從し。盤毘尼苑ゐ入ゐ。異景林天王乃威德ゐも劣り。ゐ〜ゐる者眼と拔ろくゝどゝ。其次ゐ月景城の憍曇彌夫人身乃粧裝心も紛ゐ。扨ゐ扮ゐ。數多乃女官ゐ囲繞せ。れ彩鳳乃輦ゐ乘て入る。其次ハ破利遮那城乃好容夫人。其次ハ吒那里城乃美容夫人。其余後宮三千乃女官今日を曉し。各粧裝をつゝ。美麗を究め。清瀧城へ參集し。殿中の中央ハ淨飯王乃玉乃牀を設け。左ゐ广耶夫人乃坐。右ハ憍曇彌夫人乃坐。其次ハ美容夫人乃坐。其余女官両辺ゐ居流し。二陛陽〜三大臣ゐ。月卿雲客冠を戴く。袖を連て並居し。時ゐ淨飯王女官を召し。今日ハ大宴の主ハ广耶ゐ定め〜り。疾く迎き〜られと。宣旨ある。女官畏り〜。曰。广耶后妃ハ大王と。父前ゐ奥を促し。此園ゐ入る。ゐ〜ゐ。大王乃睿慮を憚り。後宮ゐ待ゐ〜り。いざ結ゐ〜。其

まゐて後宮へ参り。宣旨の如く后妃へ中あり。摩耶夫人の御命を奉ぬ重妃御
身なり。今日八月いさゝか宮中傳れ。徐に清瑞殿へ至り玉ふ其粧裝奈何とかたれば。斜に
八色の絲をとて七種の英を造り。宝冠の巾子に挿け。瑠璃破利瑪瑙琥珀金銀
車渠珊瑚七宝の瑠璃を結ぶ。羅綾の御衣の上に花鳥を繡せ。纈纈の袿を
重ね。碧玉の石帶を結び。緋の裳踏まぐれ。丈に余る鬢は瑠璃を伸べるごとく。
宛轉たる黛は遠山の霞に似たり。青蓮の眸頃國の色をこめ。丹花の唇百般の媚
を含む。將に是白雪芙蓉の花の色露を帶るに異ならざる。姿は三十二相兼備へ
八十種好身に余まる。今まぐはの花の如く月の如く美し。三殿の后妃ならぶ。三千の女官
も忽ち顏色を失ひ。瀾干たる天星の。滿月の影に光を奪るに紡績さり時に不思
議なるに。淨瑠璃世界の御主医王善逝瑠璃光如来虛空に降臨まりし。微妙不
可思儀の光明を放ちて。摩耶夫人の頂を照し玉ふ。日月光佛も左に在りて光明
を放ちまひ。四智円妙仏慧の如来五智円滿の法身如来をまぐる五十二の聖衆虛空

無我の光をそへ摩耶夫人の容色いよ〳〵照輝くばかり也。徐に淨飯王を拜し御光
姉憍曇彌其余亜居る后妃に礼を施し。後の席に就き此時佛母の胎内に
在ます法王如来は三密微妙の神通力中に。三千世界の衆生を利益まします寄特と示
さるゝ。思召。平等衆生皆是我子歡喜踊躍の功德を現し。不遍真如隨縁真
如実相真如三光利益の光をそへ我母自然付屬功德と觀じ玉へば。夫人の御身より
淨光の如く盤昆花の花に映じて紅白紫黃色彩增。其妙色は夫人の衣に
ろひく。錦繡いよ〳〵鮮なり。淨飯王は宮妃諸卿一度摩耶夫人の面をうかゝれば心者
歡喜を生ず。疾病ある者忽ち其病平愈しるゝ不測なる。中に憍曇彌夫人は
対夫人に君寵を奪れ頓悪の煩身を焦し。今日の御宴に出るも心進まざれども倫
言なれば為方なく心ならずあるて出席有り。法王如来の威神力中に。罪障消滅の時
至り久しく今摩耶夫人の顏を見ること等しく。胸中の猛火忽に消ぬ。盛りの夫人の姿
に妹を悪み姉を兇咀調伏して出産を妨げ。三年の間憂苦をうんせしを我ならず

鬼畜ホ劣マシ心よと慚愧の涙をそゝめ悪念頓ホ翻リ大善心をゞ生ド ホひろ滅
や一時ノ懺悔ホ億劫ノ罪消ヘ無為無漏ノ契リ佛浄土ノ結縁となるべしの金
言煩悩即菩提ノ玄旨ホ統ホひ一切ノ衆生を救ハ難有ノ大慈悲カリ

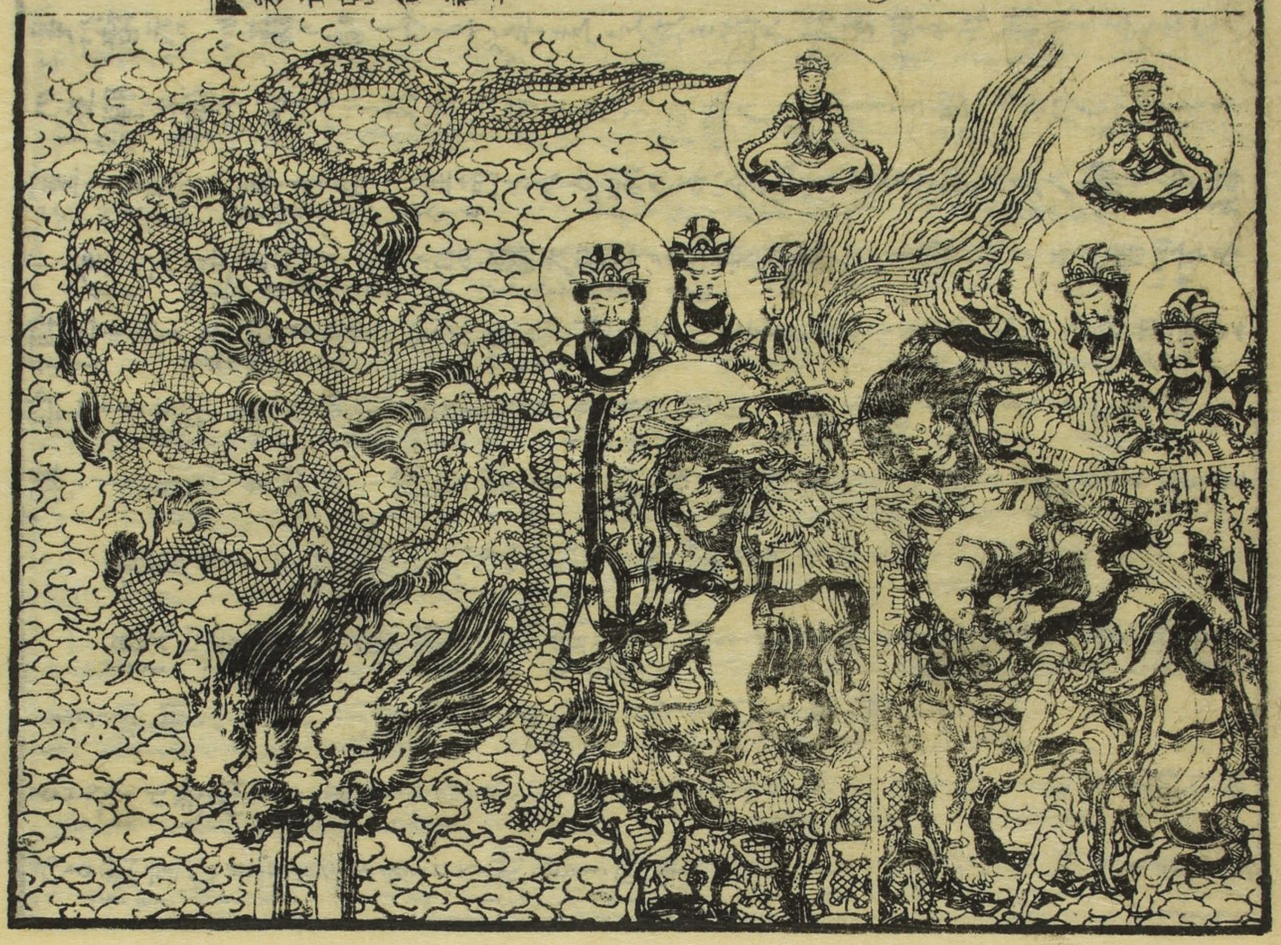
悉達太子降誕現天地瑞異

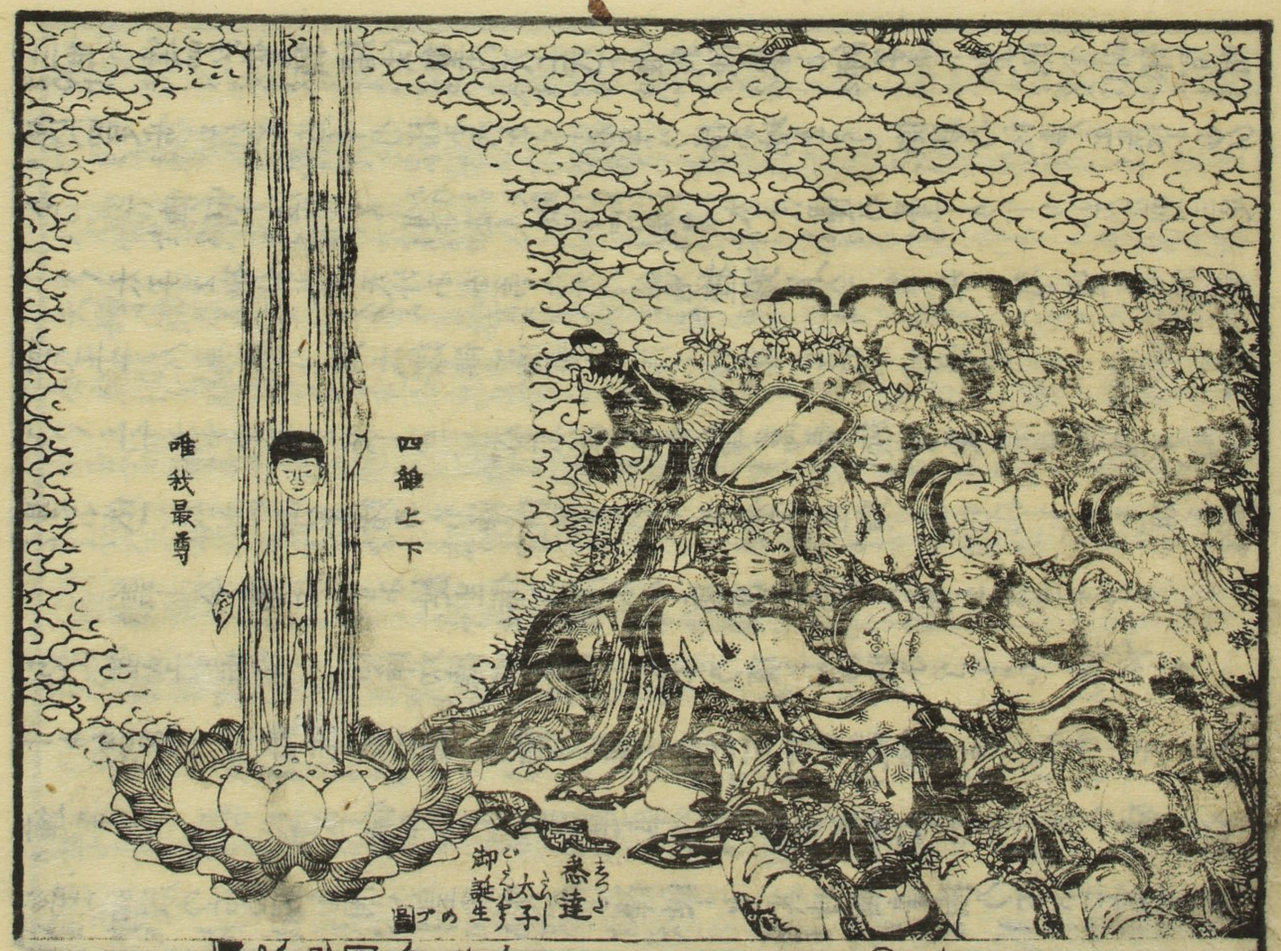
斯ク清瑩殿裡ホハ宮侍ノ嫁女童女盃盤を捧ゲ珠玉ノ吉物ホ山海ノ慈味珍味を
盛陳シ恭ク運テ已ホ與宴を始ル大王鰐を挙ゲ摩耶夫人ホ賜ひ献酬
ホ女官諸卿ノ中ホ絲竹ノ堪能舞曳を奏シ乱舞ノ達者ハ舞をゝゞ御
旌ノ真を色ホ君臣與ホ入歓喜悦楽限リ浄飯王睿慮殊ホ甚シ稍醉
ホ無ク歌ひ數曳ノ宮女ホ命ジ抑此蓋毘尼園ノ草木ハ萬國ノ奇花珍菓を
集植シ四季折々の荘観ホ具ル猥ホ折採ル我禁ゼとゝ今日ハ摩耶ノ意を
慰むるノ無憂樹を除ク自余の諸花を各一枝ヅ折把ク夫人の前ホ捧ゲ宜命
ホ夫人ノ意ホ可ひ符ホキ一人花を折得ル者ホ重ク褒賞を与行ベと宣旨

ある後宮ノ女官是を奉リて悦ひ何乎后妃ノ意ホ可花を折得ムと廣ク尤
る苑中ホ咲満る萬木千草ノ花をかひくホ折把花枝ホ捧ゲ后妃ホ捧げぬ
まゞ御佛ホ一枝ノ花を捧げ菩提の菓を得る瀧鰐カリ

因ホ曰今我ガ皇國諸寺院淮佛ノ厨子の屋根を草花ホ葺ハ此時ノ
遺風カリ ホ京摂ノ人家四月八日ホ躍躍を天ホ排ル中ホ此謂カリ

斯ク ホ酒燕を燈ホ與を増ル ホ浄飯王ノ那夫人ホ對願ク ハ御身ホ労を
辞セを苑中弟一の珍花無憂樹ノ花を一枝折ク朕ホ賜と仰ル后妃敬ゲ
領掌ア玉牀を起ク徐ホ無憂樹ノ下ホ立寄ホ不思議や此時虚空上
ノ金色ノ光を放ち二方れの繻天降テ無憂樹ノ梢ホ翻翻リ霊香四方ホ
薫ジ苑中ノ草木悉ク金色とカリ 諸の石ハ金剛と変ジ時ホ夫人纖々タル右
の玉臂を伸シ動ホ花枝自然屈シ撓テ后妃ノ御手と近ク垂下ル ホ
是ハ諸天ノ加護ノ喜ビ やて手まさくたる花ノ枝を和ラ折採人と為ベ




唯我最尊
四海上下
恭敬
太子
御誕生の図

忽ち御夜の右の脇を開く皇子突然と降誕し給ふ其時無憂樹の下ゐ七宝七茎の
蓮華生じ給ひ大車輪の如し太子蓮華の臺ゐ踏み給ふ今ゆく二流の瀑ゐ注ぎ
一ゐ忽然として難陀龍王優波難陀龍王金色二躰の龍神と現じ八色の光を放
ちく虚空ゐ飛揚し清浄功徳水を雨し太子の頂より四肢ゐ灌ぐ洗浴を
盍し今佛生會ゐ延生佛の像を千歳菓を洒ぐ此義を表せるなり
是ゐ依て太子の御身緒の不浄洗ひ流れく黄金の色顕る毛孔より大光明を放
ちく三千大千世界を照し給ふ天上ゐ梵天帝釋禹眷族増長廣目持國夏剛の
四天王共ゐ無數の諸天諸佛菩薩垂来降し妙華を散し妓楽を奏し金剛合掌
しく太子を敬礼ある天外ゐ出る弟六天の魔種顕れ今より永く我が道長滅を
歎じて懊惱し泣悲す是ゐ三十四の瑞應太子八蓮の臺より下り給ひ前へ三足
後へ四足歩み給ひく左手の指ゐ天を指し右手の指ゐ地を指し微妙の初声を發し給ひ
三世の達四弘誓願諸法壓内天上天下唯我独尊と師子吼し給ひ胎金剛部智明

蓮華部の菩薩ゐ出でて耶夫人八太子を産み給ひく此の苦悩を除く心禪定ゐ入る如く無生法忍
の形を收め無憂樹の下ゐ憩ひ給ふ俄ゐ霊泉涌出て其水香潔ゐ温な
れば憍曇彌夫人傅の女官ゐ命じて耶夫人の御身其水ゐ洗ひ浄ちしめ給ふ烏丸軍
夫婦八錦の袍を以て太子を抱きまつる殿上ゐ昇く浄飯王の睿賢ゐ入給ふ太王八諸
の瑞相を眼前ゐ見給ふ上今ゐ皇子を見給ふ王の如く三十二相八十種好具足
し給へば歓喜踊躍ゐ堪ゑず殿上殿下の諸人も勇を悦び皆萬歳を唱へく慶賀し奉
りぬ大王烏将軍ゐ命じて耶夫人を輦車ゐ乗せ進ぜ奉る青陽城へ還らせ給ふ若君
を憍曇彌夫人ゐ抱かせ奉る御身龍馬ゐ乗れ蓋毘尼園を立て給ふ后妃女官百司
百官前後を供奉し王宮へ還御なりぬ

摩耶夫人逝去

茲ゐ不思議なる八皇太子出誕の日ゐ當て釈種の五百王子日ゐ悉く男子を産
ゐ五百王の厩皆駒を生む何れも毛色純白ゐて髣髴珠を貫く殊更浄飯王の厩

麗の駒殊絶なり君を捷徒と号く。備も后妃千耶夫人を盥毘尼園より吉陽城へ還り給ひ後ハ神身悩み給ふ事ハなれども気力渇く飲食を欲ず唯昏々として錦帳の裡ふ中臥給ふを烏将軍さゞら宮乃女官胸を痛む時を見て御容躰を王宮へ奏聞し浄飯王も大いふ睿慮を悩まし普く名医を求め治療手を尽させ給へ憍曇弥夫人ハ賢智なる婦母を擇ミ皇子を傳育ら吉陽城ふ住て。昼夜を捨ず看病ふ付て。久しく兄唱乃妻を悔歎ず心中ふ天地ふ祈誓ひ。あられ妹夫人乃患病今一度平愈せ給へとれも尚能ず自ら身を捨て妹后乃命ふ代せむと。丹誠を尽して祈ら給へども定業ふや其甲斐なく。太子降誕より七日めの暁ふ摩耶夫人ハ姉后かくれふ烏将夫婦を抗乃ふ招ず仰ぐハ躰と宿世乃戒行いとく浄飯大王ふ幸ひせられ進ら世人乃尊敬ふ逢おもろ悦楽極ずとの妻なく皇太子をさ産なりハ世ふ例なき福分之しるふ今已ふ現世乃縁盡く無為乃都へ旋り侍る。素り一念不生乃心ふハ迷ひなく悟り有ふ憎愛乃念数ら。煩悩即菩提生死即涅槃と。時ハ心を残さず方ゆ。

願乃ハ姉君太子を御身乃子と思召て慈育給へ烏将軍婦夫ハ今日より姉君ハ自と御乃信ふ傳ず仕へ太子成長給ひて悪ず御行迹あらず練正ーなれよ将大王ふ奏して自ら亡骸を此吉陽城乃東なる夕陽山ふて荼毘ー。墳乃もとーふ無憂樹を植させ給へと願なれ。くれぐれ遺言ー。坐を端ー正念合掌ーて眠るが如く逝去ー。憍曇弥夫人を其侍空ー死骸ふもとり著。天ふ悲き地ふ歎ず門ー道わこ閉ぐれ給ひ烏将軍夫婦ハ悲歎ハ火ず更乃。宮中乃女官暗夜ふ灯を失ひ心地ー。ぐてゆくとく泣悲む声。宮外さゞら安え乃。悲ず斯く果なる妻なれども烏将軍泣き王宮へ参内ー。耶夫人嘉去のより奏ー。れば浄飯王あつと許ふ昏倒ーて歎ず給ひ借も過ぎる花乃妻ハ耶ず姿の花を散ず兆なるうさーも階老の契を捨身強丸泉へ赴む給ん朕を日ー道ふ伴ふ。回るね妻をさへ思ひぶけ。御衣の袂も御涙ふ絞るむうれんえさせ給ふ三大臣百司百官後宮乃女官嫉女まで。哀涙ふ咽むこと。者乃一月先臣帝を練めなり。光生ととり天敷ふ。后妃臨終乃一句ふ。煩悩即菩提生死即涅

槃と曰へり上人定まれる命數を知無上菩提ゐのり玉ふ明々深くゐ歎をおひそ
とゐ ゐとりゐ浄飯王よりゐ御洞をぐめむひ青陽城へ御幸有こ后妃乃亡骸ゐ
對ひ玉ふゐ花乃顔生ゐ如く些一日容色変ぜざれど愛者乃念を禁じ玉ふ
ひ此侭宮中ゐ留めまゐらく思召ぞ理りなりなる然て臣下乃練奏黙止ざらゐ
亡骸を收て香木乃棺ゐ宮亀遺言なれど夕陽山ゐ送り種々乃洪養數を盡し
終ゐ香薪を積んく茶毘ゐ玉ふ噫呼悲しひかなさも綽約たる桃李の姿も一
度無常乃風ゐ辭ず夕陽山下乃煙と倶ゐ消ゐ玉ふ哀なり 斯てその
玉骨を七宝乃器ゐ拾納地景を占て埋葬ゐ盤毘尼園乃主日竜殿を夕陽山
ゐ移し十六丈乃宝塔を建朝前ゐ無憂樹を移し植させ給ふ後年世尊成
道して迦毘羅城へ還幸なりむひ時青竜殿を梵刹と定め摩耶山切利天
正寺と号ひ乃ゐ経ゐ憍曇彌夫人乃傅官馬将軍ゐ摩耶夫人乃逝去あるとも
ゐく深く慚愧ゐ主命ゐ乃ゐ兄咀を乞ゐ薬を勧ゐ罪乃深さよとて我と

先非を悔ゐ乳乃病を愛ゐ摩耶夫人薨去乃後十五日ゐて終ゐ乳死ゐたりけり

悉達太子入學阿私陀仙示三十二相

結髮憍曇彌夫人を深く前世乃罪を懺悔ゐ其罪を償人ゐ皇太子を我
子ゐ慈育乃ゐ如くとく後宮乃侍女の中ゐ才智勝れ者を數多擇出
ゐ守傅奉ゐ伴飯王ゐ皇子の爲ゐ新ゐ三時殿を建ひ夏ゐ涼ゐ樓閣ゐ
太子を生ゐ冬ゐ温乃殿裏ゐく育ゐめひ衣裳服飾花麗を極ゐとゐ
乃ゐ斯く若君三才ゐ成ひ給ふ初て参内ゐ給ひ其容貌を睿賢ゐ給ふ胎内
三年居ひ其ゐ六七歳ゐ乃如く言語動止則ゐ合ひ天乃ゐ授ける王顔光りて
ゐく許ゐ御恰斜ゐ乃ゐ文道乃博士を召れく皇太子乃名を撰ぜゐ博士
敬て奉り古戎録新を推て纔論ゐ奏て王ゐ奏ゐく白王子御降誕の時三十
四乃瑞應ゐ諸乃奇持悉く達ぜ給ひ乃ゐ因て御諱を悉達太子と呼
ゐ乃ゐ八ゐ乃ゐ山名甚ゐ好て數乃賞録を博士ゐ

に至り是より緒人皇子を悉達太子と称し奉り。尊敬する事大かたならず。鳥将軍ハ
太子の日に麗しく生立玉ふを見るにも。亡耶夫人此世に在さバ。何ばかり悦び玉はんと思ひつゝ
懐旧の涙にむせびけるが。せめて夕陽山の廟へ太子を詣させまゐらせ。御母后妃の尊霊を慰め
進せばやと。憍曇彌夫人に其事を申しけるに。実にもと心付ければ。さこそ妹夫人の嬉しと
思召らめ。自由且夕忘るゝひまなかりし。幸ひ卯月中ばなりける。来ル八日に太子を伴ひ。夕陽
山へ詣すべし。此事大王に奏せよと命じ給ふ。鳥将軍領掌し参内して。廟参の義を願
ふ。子細なく勅許ある。是に依て憍曇彌夫人姨母に皇太子を守り傅る。鳥将軍夫婦女
官数多召具し。輿車に乗して夕陽山の廟に参詣ある。松柏鬱茂し。草茫々として。鳥
雀物恐げに嘯き。風にまかする梢の露も。袖の涙に争ひ。盛者必衰の理眼前に見えて。廟の
前に縁 植られたる無憂樹の花ハ昔にかはらず咲ぬれども。手折し主ハ苔の下に朽果。中
七宝荘厳の宮殿楼閣も。住人なければ荒ものを勝り。空しく狐兎の栖となる光景なるに
付ても。猶涙の種なりける。憍曇彌をはじめ諸人も不覚に袖をぞ絞りける。然るに太子

幼き御意に無憂樹の花を愛玉ひ。木の下へはしりよらせ玉へバ。鳥将軍を召れ彼花を取れよと
御意ありけるにぞ。鳥将軍ハ故夫人の此花を折んとして。御産の気つき給ひ。終に逝去玉ひ
たまひしことを思ひ出るにつけ。胸塞り涙さしぐみて。左右の者にいひつけんともせず忙然として侍り居より
折節風も発りて。村雨一陣降きたりければ。鳥将軍遽しく太子を擁抱し。堂内へ入まゐらせ
太子大いにむつかり。何とて花を得させざると責玉へバ。鳥将軍とても。おそれながら今かの者
君や。今より三年まへ。みまかり玉ひ。終に母君を見放しまゐらせ。此花のゆへぞかし。然れども此花を
御母后しかりしき玉ひ。雨を厭ひ風を防ぎ。まもらせ玉ふこそ。せめてもの御孝行なれ。増て枝なりとも
猥りにも折せまじと。諫まゐらする。憍曇彌夫人も堂内にて。妹后の霊を祭り。供養
して居玉ひしが。今鳥将軍が言を聞て。身に冷汗を流し。彼三年が間妊娠せし所為
なりける。且夕居起に心苦しく思ひし。今許させ玉へと心中に懺悔し。慚愧の涙にくれさせ玉ふ
太子ハ鳥将軍が言を聞て。さては我ハ実の母君まします。御名を何と申し。何れにか
逝去玉ひしと。又問給ふに。鳥将軍も妻と是を襲まんと思ひ。種々言ひ延して。されども只管

尋問〳〵止むられじせんをゑらぶて花の宮ゝ折〳〵右脇より降延おき〳〵後七日ゆく
遊去むひ遺言ゆ依て夕陽山ゆ葬り無憂樹を移〳〵植〳〵おくゆ結〳〵せるゆ
ゆゑ太子維心ゆ悲〳〵思ふ雨そと泣むひ嘶彼花を折〳〵得させよ母君と思
且々ゆふんんと仰きろゆを見悲ゆ〳〵技折〳〵進〳〵せられ限ゆ〳〵悦びむひ花飛ゆ拂〳〵
ゆれせどゆゆゆ斯て長九日ゆ頃ゆれゆ嶋曇彌夫人太子を誘ひ奉り音陽城へ遊幸
〳〵ゆ其後年月を〳〵太子五才ゆ成むひ加冠の儀式あり淨飯王臣下ゆ勅して七宮の
玉冠ゆひ瑤珞を造て加へ給ふ諸七才ゆ成て父王普く四天下ゆ觸て射藝の堪
能を召き太子ゆ射術を学ぶ〳〵ゆ一月ゆ程を〳〵て悉く妓所を究ゆ〳〵ゆを射
師大ゆ驚歎〳〵是凡人ゆ〳〵在ぬと吾を卷り其余絲竹乱舞を始諸般の技藝を
学ひゆゆ旬日ゆ〳〵温奥を悟覚ゆゆゆ緒人益奇異の思を〳〵ぬ偖八才ゆ成〳〵せ
むむ文王太子ゆ文道を学ぶ〳〵ゆ〳〵と思召群臣を聚〳〵維を〳〵太子ゆ文道の師範とゆす
ゆゆ〳〵勅向ゆ〳〵ゆ月卿雲閣奉り維彼と其人を撰び論ぶゆ尉頭賢弗ゆ勝る博

学ゆ才ゆ人有ぬ〳〵ぬと衆議一決し此旨奏聞〳〵れ〳〵ぬ賢弗ゆ方へ遣へ〳〵文道と
学ぶ〳〵ひぬ〳〵そ先爵頭賢弗を召き〳〵太子ゆ師範〳〵ゆ〳〵ゆ昔勅疑ゆ〳〵ゆ月
景城へ右の昔を仰渡され〳〵ゆ嶋曇彌敬で領掌〳〵むひ勅使ゆ就て回奏〳〵ゆ
ゆ太子御入学ゆ吏最上ゆ御吏ゆ〳〵ゆ博士の紆へ参り〳〵ゆ女宮ゆ〳〵ゆ似合〳〵
〳〵ぬ何年御学ひゆ友と〳〵ゆ〳〵ゆ女年を擇び太子ゆ扈従さむと願ゆ大王
理りゆ思召維ゆ太子ゆ文道修行ゆ友と〳〵ゆ〳〵と諸臣ゆ問ゆゆ星光ゆ嬀男烏陀
夷年齢十三才賢明ゆ〳〵智才人ゆ勝れ〳〵ぬ是ゆ如〳〵ぬと奏〳〵ゆ〳〵ゆ知ち星
光臣へ勅命下り烏陀夷を太子ゆ扈従ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ星光人ゆ悦び
家ゆ名誉是ゆ過ぎと敬で領掌〳〵偖烏陀夷を近く招ぬ汝を皇太子ゆ御扈
従ゆ〳〵〳〵倫命下れゆ是願てゆ得ぬ〳〵ぬ幸福ゆ〳〵ゆ能く身を慎み心を竭
〳〵太子ゆ仕ふゆ〳〵時ゆ御傷を去むひ俱ゆ文道を学ぶ〳〵ゆ〳〵ゆ教刻を加へ月景
城へ進ぬ〳〵ぬ嶋曇彌夫人御怡悦ゆ〳〵此余後才ゆ童子十余人を擇出〳〵扈

從て。吉日良辰を撰て太子を輦車に乗せ嬪母女官緒童子戎隨從せしめ博士爵頭賢弗が方へ参せ玉ふ。賢弗半途まで出迎へ敬て鳥駕を拜し。我が館へ請入奉り入学の儀式厳重に執行ひ是より太子を別館に留め玉ふ。先文道の揩揮なれば。筆道を学ばせ給ふに本来貫如来の化身なれば。初て筆を執書を学び給ふ。支一旬の日を経ずして。天性不測の筆力四蓋鳳舞馬虎頭の畫。悉心雲懸河驪竜の点。悉く法に合ざる支なく。覧弗も及ざる支遠なれば心中大に驚き恐る。自ら慚愧に勝ず。猶も太子あまたを試みに二百部の世益編。百部の緘締編二部の秘書を抜出して。太子の御前に置き。此二部の書籍の内。御意に学び入と思召書を擇ばへ。何を教授たしまつるべきや。悉達太子二種の書の外題を見給ふに一は神変妙奇集とあり。一は愛心報謝編とあり。太子心中に思ひ給ふ。神変妙奇集は仙家道術医術の書なり。國家に益ある書なるべし。将愛心報謝編は上求菩提の書なるべし。明け暮抑も輪王の位を践て天下を威伏し。百年の栄花を極る支能はず。花が母君已に遠逝の内に逝去ぬ。年月の孝養なりがたし。其鴻恩を報ぜんに出家学道して。一切種智を求て。母君の霊を弔て。永く生死輪廻を離れ。人を救ふの孝道なるべし。胸中に思慮を定ひ俳賢弗に對ひ。丸は唯緘締編を学ばんと仰ける。賢弗心裡に該れ此太子国家有益の書なり。上求菩提の書なり。悉達太子の萬乗の帝位を践ず。即意なり。出家得道の御望ありと覚て。若我が行に留堂して。内出塵まで。國王の責を免る支能ず。唯早く宮中へ還し給ふに。八不如と流石博士の賢弗。太子の胸裡を晴に知覚て。其只よりの程に談論して。其日を早天に館舎を出て。王宮へ参執奏の官人に就て奏たてまつる。皇太子聰明睿智なる支一を聞て萬を悟り。古今いまだ曾て有ざる。後世猶有り。即神変妙奇集に在る。空に教導なる。仰願くは宮中へ召還して。別に良師を擇ばせ給へ。知師を軌して。浄飯王に審ひ。太子の行に留学する支いまだ義理に何の障

達せる夷有て斯中に賢弗ゞ曰皇太子書を学ぶに初て筆を下し一覧して点
畫悉く法に合ひ自然に龍牙虎爪の勢ひを具ふ亦書籍を閲して天文地
理礼則筭數に通ぜり緒道の理に通ぜざることなく愚臣の及ぶさる夷遠くして
浄飯王に曰く如之何ぞ誰をか太子の師とせん賢弗胆裡に念ふ悉達太子已に
厭離世塵の望在と乎我此義を奏せば大王敢て信じ玉はじ但し維那里國香山に住
る阿私陀仙人神通廣大の賢仙なれ渠を招き太子の師範たらしめん決
定太子の出家の望在を知る太王に告ぐし浄飯王其言を信じ太子と宮
中より出し給ふ白王子歓楽に耽れり自然威道の望を断ぜんと思惟し
偖王に對ひて曰太子の師範たる者ハ間中に有ず維那里國香山と
に深山に阿私陀仙と云賢仙の神通廣大なる通せざる道なしと大王是を召て
太子の師となし給ふと奏す浄飯王悅び給ひ賢弗に御暇を乞ひ先千人の宮人に輦
車を牽しめ太子を宮中に迎へ還させ給ひ偖維那の香山へ勅使に遣はさんと群

臣集て経議あり其道数千里に亦其間大河嶮山ありて往安らかなれ維有て奏
らく其者なく空しく時日を送るこゝ此時彼阿私陀仙人を香山に在なり天眼通を
以て浄飯王の意を識り云に駕して一瞬の間に迦毘羅城に飛来り王宮の門に立
門の監平是を姓さく其名を問に我ハ香山の阿私陀なり浄飯王我を招き給ふの意を
知て来りと答監平猶疑ふ抗奏の公卿に就て斯と奏達し給ふ浄飯王且疑
ひ且悅び給ふ百官に命じて出て仙人を迎へ殿上に清て對面し給ふ面熟せる東の
両眼星の如ひ髭髮悉く紫金色殆聖俗の類に非ず大王深く尊敬し其来
意を問給ふ阿私陀白我前に大王の太子盧毘尼苑無憂樹下に出現し給ふ三十二
の瑞應現ず七要に法結を裝ひ給ふを聞ひぬ然に爵頭賢弗我を召て太
子の師とせんと奏せ給ふ渠が一時の方便なり我に太子を相を大王に告る所おしむ
んと云我に神通力ありて大王の意を識王宮に来り願くハ一度太子に見まゐ
らせ浄飯王歓喜に勝ずと阿私陀仙と伴い宮殿車を促して月景城に行幸あり

憍曇彌夫人ハ對ス。仙翁ノ来意ヲ示シ。悉達太子ヲ召テ仙人ヲ礼拜セシムベシ。
阿私陀忙ク抑笛太子ハ是三界中ノ至尊。何ゾ吾ヲ拜セシムルノ理アラン。と
自起ク合掌シ。太子ノ足ヲ拜セル事三度。憍曇彌仙翁ハ對シ願クハ
神仙太子ヲ観相ス。将来ノ縞編ヲ示シ。仰ぎて阿私陀諾ス熟ス太
子ノ相貌ヲ見ル四肢ヲ見テ。一賞三嘆シ。此君実ハ三十二相ヲ具足シ多リ
王位ヲ踐ムベク十九ハ転輪王ト成ルベシ。出塵シ一切種智ヲ成シテ
天人ヲ済度シ給フ。ハ尊やスク亦三拜ヲ浄飯王問ヒ奉ル三十二相ト知何
ナル事ヲ云ヒ。阿私陀太子ヲ指ス白一ハ頂髻肉成二ハ眉間白毫白輭ハ
三ハ眼睫牛王ノ如ク四ハ眼色金精ノ如ク五ハ舌声迦陵頻伽ノ如ク六ハ舌
輭ハ面ヲ覆フ且耳ノ際ハ至ル七ハ咽中二所ヨリ津液流ル八ハ味中上
味ヲ得九ハ方頰車師子ノ如ク十ハ四牙最白ク大ク十一ハ歯白齊密ハ根
深ク十二ハ口中四十歯アリ十三ハ肩圓好十四ハ身廣端正十五ハ師子王ノ如ク

十六ハ両腋下満ク十七ハ両足下両腋下両肩上項中皆満ル十八ハ両足下
相アリ十八ハ皮薄ク細滑ニシテ塵垢ヲ受ズ十九ハ身ノ色微妙ニシテ閻浮檀
金ハ勝リ二十ハ毛上ハ向靡青色ハシテ右ハ旋リ廿一ハ満身ノ毛孔ハ悉ク
一毛生シ輭ハ廿二ハ身ノ縦横等ク泥倶盧樹ノ如シ廿三ハ陰藏相象王馬王ノ
如ク廿四ハ正住両手膝ヲ摩ス廿五ハ脚腨纎好伊泥延魚王ノ如ク廿六ハ足跌
高ク平ニシテ好跟ト相稱ス廿七ハ足指合縵網金人ハ勝ル廿八ハ足跟満ク具足
満好廿九ハ手足柔輭ハ金人身分ハ勝リ三十ハ手足指長ク廿一ハ足下七幅
網轉輪相ヲ具ス廿二ハ足下安下蓋底ノ如シ遂ニハ指示シ給フ浄飯王感伏シ
ムルハ何ハ。朕ガ太子已ハ如斯好相アレバ福是ハ遇ガ。並ビ玉在世ニ轉輪王ト
なり出家せず一切種智をなるべシと。此両端雲壤ノ違アリ朕衰老ハ人後ハ國
王ヲ太子ハ繼リ。身ハ山林ニ居シテ風月ヲ翫ムと。並ハ太子出家学道せ
む。誰ハ王位ヲ繼ルベキ願クハ神仙両端ノ内ゾ是ナル精ク考テ示シ給へと

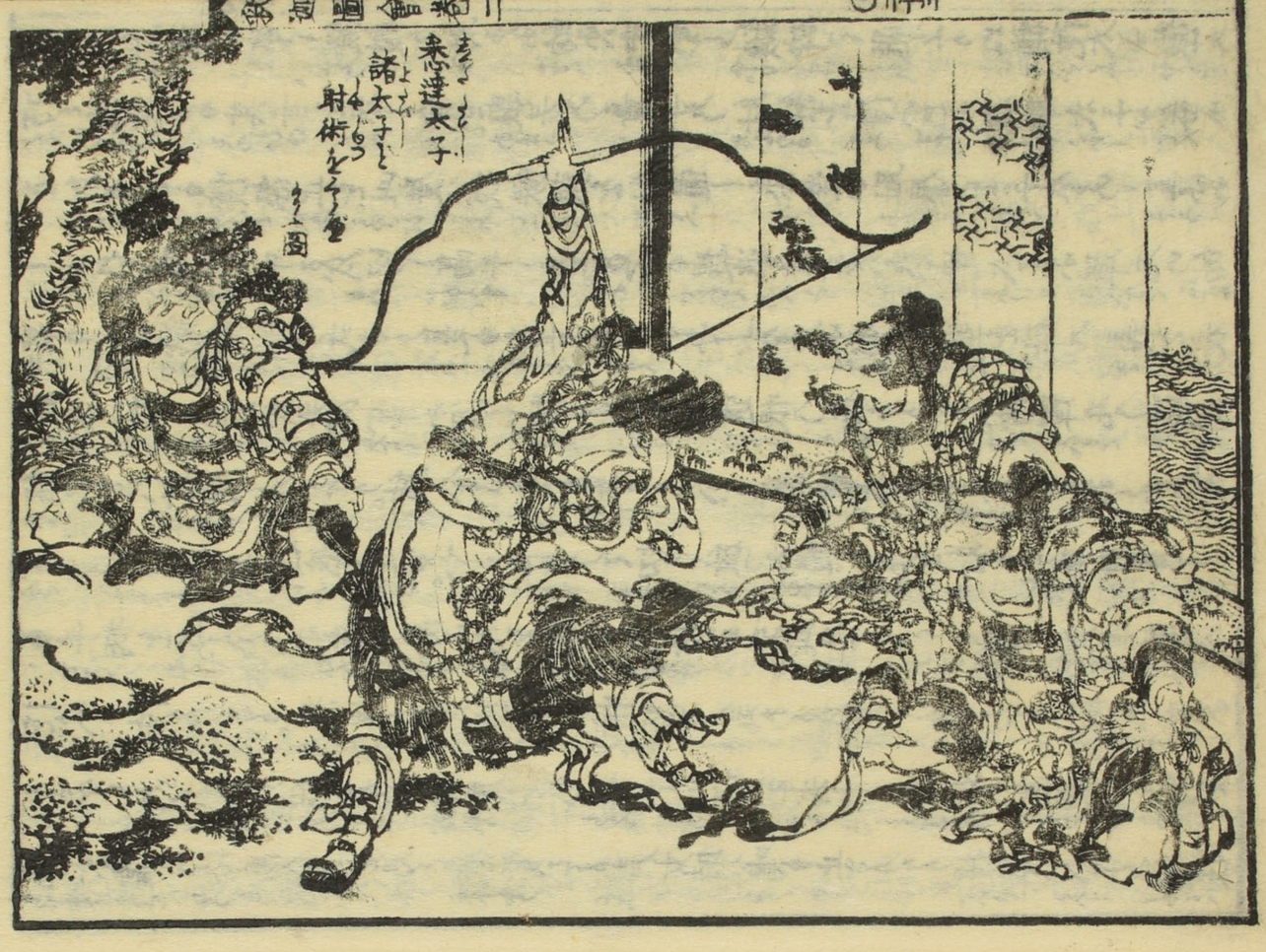
仰ぎ奉る阿私陀仙人、天機漏とがたく、遂に知るべからざるの事、袖を拂ひ座を起て、手をもて雲を招き、幾ばくか無して虛空に昇り、香山をさして飛去る。

悉達太子与提婆達多競技

淨飯王、阿私陀仙人の飛去り、既見えざるに、心中疑惑を生ず。昔、摩耶夫人、懷胎三年、再び一時百人の中に、一人の相者、胎内の太子、成道正覺して衆生を濟度せんと云へり。然思へば、若此太子、朕を捨て出家得道せば、頗る昏慮を煩はし、五百人の女女の容貌端麗なる者を擇み、太子の左右に侍らし、其遊戯の說物具、とと以て事なく、且暮歌舞吹彈して、太子の心を慰し、以て其の悦樂をもて厭離の心を消せしめん。御心なり。斯て太子十歲に成る、春正月、恒例として、小弓の式の淨飯王、諸釋種の貴曹を召、其役を定め、東方の大將を悉達太子とし、副將を耳露飯王の皇子、廣耶太子とし、其余百人の童子の俊才を擇び、後に、西方の太將を解飯王の皇子、提婆太子とし、副將を白飯王の皇子、難陀太子とし、百人の童子の奇才を擇び、後世、諸城中に射場を構へ、鑒言國の官人、四方を守り、樓上に八淨飯王出御あり、三大臣、諸大臣、卿雲客も、後階に列坐し、小弓の勝負を見物す。當年八月、悉達太子、於て小弓の頭を、東西の諸王子の親戚、今日を曠と、花美を盡し、我見を扮せ、烈を正して、射場に移り、入光景、滅に挑李の咲を、如くいと榮ありてぞ見える。斯て、小弓の式を始る、其最初、八彈丸的にて四方の玉、空中に投上、其落下る、然射る法なり、西陣より丸を彈ぜば、東陣より出て、是を射、東陣より丸を彈ぜば、西陣より出て、是を射る、然と、魚垂、曹通の的に、事変り、空中より落る玉なれば、飛鳥を射るが如く、難う能射中る者なし。偶、難陀王を射削る者あれば、是を高敷に、賞衣を賜はり、其ハ、それ、西東互に、射術を競げ、丸を射て、勝負を爭ふ、東陣、多く勝て、賞衣を賜者、西陣に倍し、然れば、西陣の頭、提婆達多、年十五、才敏を、雄く、又力有の、なりなど、射術八五天竺に敵なし、紆の達人、更に、剛力の

旃陀太子も提婆に劣まじと九荒童子なるが巳に西陣の敗せしかバ倶に怒
氣を生じ。今ハ東西ともに頭副将の勝負なれバ如何にして射勝恥辱を雪ん
ものと。旃陀太子力腕を揮て射場に立出て。一丸を揀て虚空遥に投上て賁
耶太子弓箭を番て兵と射るに過ず丸を射削り淨飯王を始め諸人之を見
誉即ち賞衣を賜ふ。賁耶太子息を継し亦一丸を把て虚空に投上ける旃陀太子
弓箭を番て是を射るに筈、丸を射削て落せられし。君臣亦賞誉して賞物
を賜ひ。此一番ハ勝負互角なれバ次ハ両陣の頭の勝負なれバ國王ハ中に及ぶまで月卿
雲客下ざまの官人やい瞬もせず守り居る所に西陣より提婆達多錦繡の装束
きらびやかに歩拾意気揚々として歩出悉達太子に一揖し丸を把て膂力に任し
虚空遥に投揚るに無双の金剛力なれバ其丸しばし鳴響て半天より流星のごとく
落下る間に悉達太子ハ百花の繡せし羅縠の御衣に緋の裳をちき黄金の強弓
に鉄箭をはげ満月の如く引しぼり虚空に向ひ兵と射るに四寸の丸を射貫き

地上に堕し落る人是を見て感賞する声暫時ハ鳴も止ざりけり。提婆ハ太子が射技
を見て大いに感じ我も丸を射貫んと心に誓て此場を去じと意頭に焦燥て弓箭を
はげて待かけたり。悉達太子ハ提婆が憤怒の気色を早く察し玉ひ何卒凛に
手柄をさせんと心に念じ徐に丸を把て投揚玉ふに此丸ハ高く鳴て矢頭鏃落
下る所を待設たる提婆達多空と声して切て放つに過ず丸を射るに亦射貫たる
飴ハならず只射削しのミなり。諸人之是を誉といへども悉達太子に及ばざるもされバ
提婆ハ頗る面目なく失ひ掌に深く憤りぬ是ぞ遺恨の初なりける。諸弾丸の儀式
畢り次ハ鐵皷的の式なり是も童子の力におよばざれバ非も堅を砕の義を表
しされど唯的に中るのミ高手しまと甚で提婆達多ハ悉達太子に弾丸の的
を射貫さる憤怒止ず此度ハ我鉄皷を射通し悉達に恥辱を与へんと意に
巧ミ旃陀も其旨を示し合せ數多の童子等射終を待に巳に賁耶太子が番に
およびて射場に出て鉄皷を射るに的にハ中れども餘る鏃砕て飛去りぬ旃陀太子箭を以


悉達太子
諸太子と
射術をくらべ
の図

提婆旃陀
両太子力競の
図

徐ろに出て鉄弓をきりきりと弩絞矢声とともに切て放たるに一つの鉄鼓を射貫き。緒人見を見て其弓勢を感歎し其次に提婆達多鵬乃歩び如く寛々と射場に出握太なる鉄弓を弦弾し鉄箭をさげてきりきりと弩絞矢ひを固く矢ごと射るに通ること三つの鉄鼓を射貫き。満廷乃人々呵と感じ。天晴無双乃弓勢かな貫嘆を提婆に太子の顔に太子の方を見て本座に回るに今に太子のこれ浄飯王百司百官の手に汗握り乾涉を呑ざる所に太子徐て弓箭を手挟て射場に出ひ絃揮して左右に對峙弓甚だ強し別に強き弓を持きれと命じひ官人承りて強弓七弓を抜出して奉る太子七弓の中に殊更強き弓をえ撰出しひ。箭を抜ひ満月の如く弩絞矢声とともに切て放ひ其矢ヒイフツと鳴こりて的中すと見えるる。七つの鉄鼓を射貫し。尚余まる矢巌を穿忽ち清泉湧出り。上帝王より下卑官に至るまで感嘆する声四竟に響く行ゆくかびさしこそ見る烏将軍に余りの嬉しさに坐を起て舞ふてより。浄飯王に

感浅なるに太子をより提婆以下の諸童子に褒賞を賜ひ人に酒肴を出し君臣和光の興を催しひ提婆に二度に嚔勝負悉く太子に負さる事を遺恨に思さ大鵠を把て數杯を傾け酒気に乗して廣庭に狂ひ出悉く太子射芸に堪能なりと魚筋力に於ては我に及し力量の覚ある者に来て我と角觝の勝負を試よとて叫ひる見て安く諸童子の中に筋力ある輩に提婆を廣言ゑ勝てやと力試競べと我劣と庭に下て提婆に合掌あくと魚雑あくに勝者なく。千足を折く退た調陀太子のに提婆と力量等く。更に勝負を分ること捌引に成られり悉達太子二童の角觝を見て微笑ひ丸に載に力を競べ。そ従容として庭に下ひ提婆調陀二童子を二育に成られり右に撲左に撲く勝負を挑ひ提婆に悉達太子乃膂力に張れ何事勝をとり射芸乃遺恨を敬ひ人ものと調陀に同絡し精力を奮て孤拉んとすれと爭り太子の威押に敵さべ両童とも終に力義へ大地へと投られり恐とも慈悲を以て投ひ又二童の

些か傷た痛こと有り。緒人亦感称す。太子萬藝に達し、之の三事に於て勇力無人に
勝れり。然る古今未曾有なりとそ。提婆又数に事を好む。三度恥辱を受
熱腸を涼まむ由なく、不興げに後者を引く。城門を出づるに先孤の者還りくと世
回り城門の外に一大象有り。門を遮り敢て動かず。報を提婆大いに怒り。脇先
に立て城門に到りて果して大象門に横たり。牙を怒して傍に寄る提婆ますます怕
色なく、進み倚て拳を固め象の頭を嘯と撃ち。この大象金剛力に博きて地
に躃き吼ゆ。提婆従者是に依て難なく門を出る事を得たり。然る縛陀は春
屬を引き後に城門を出る。前行の者立停て進まず。縛陀其由を問ふ。従者曰く先に城
門に一大象遮り来て路を妨げ。提婆逆来て一拳に撃倒して今城門の傍に吼ゆ。
多く群人群見て路を塞進まず。と答へ縛陀宣く。我も其象を見んと。群聚を推分
象の辺に往たりと見て、歩笑を畜生何を我が行路を妨るやと。足を以て嘯と
蹴に曰く、金剛力有れば五尋なり飛ぶ。堀陀に仆れ吼苦く死に向とり。緒人是を見

て提婆縛陀と称して尽る者倍山の如く其喧一紀音城中に響く
れば悉達太子近臣を召て何事ぞやと問ふに如斯々々と言上を太子微笑して罪
なし。歓類只追退ぞ。猥に傷痛しむる。況其象を殺ひ得ざる人々。従者を率
て城外に出で件の象の辺に寄る。王の如く清た御腕にて象の牙を採曳起
ふに大象狂さと引きられて身を起す。忽ち苦痛頓に愈く。魁り太子と見
て耳を垂尾を伏て拝謝の躰をなす。山路を去て走り帰る。緒人亦是を見る。提
婆縛陀筋力壮なりと雖悉達太子の大象を曳起す魁り恐力に及ばず
称賛しけり

浄居佛一試悉達太子

年月推移て悉達太子十五才に成る。浄飯王百官を召聚勅諭して
太子年已に十五才に及ぶれば。先例の如く四海水を以て太子の項に灌ぐ春宮に立
て此旨に国の王、觸らせ給へと命ある。月卿雲客奉り緒国の王に檄文を傳へ

提婆太子大象と擊

圖

當年二月合悉達太子春宮ホ立せまふ就先例乃如く其儀式行ぜらるゝ間列位京城ノ朝覲有ざしこゞ觸ホ名る。是ホ因て緒國の小王五百乃釋種聘物を捧て我もと迦毘羅城へ參著ス。斯て其日ホ成ぬれば淨飯王大殿ホ出御あり緒國乃王も參列し文武の群臣も位階ホ侍て並居たり其時悉達太子羅綾御衣を著玉ひ七宝乃寶冠を頂ク。官人ホ傳ふ玉出玉ひ頓て繒幡蓋を掛名香を燒花を散し。妓樂を奏し舞を舞ひ其後白王乃盤ホ四海水を湛官人是を捧げ出先其露飯王是を奉る其露飯王是を頂戴有て白飯王ホ授く白飯王頂戴して解飯王ホ授し是より緒國乃王坐順ホ受傳へ月卿雲客迄戴畢り。祝賀を奏して淨飯王の御前ホ捧ぐ。帝盤水を捧けて天地を拜し玉ひ盤水を太子乃項ホ灌ぐ高声ホ唱て曰今日悉達を以て春宮ホ立朕が世嗣と定む因て今天地ホ告緒國乃王乃至五百の釋種群臣ホ是を告ぐ。其時太子頭を低て拜謝し玉ひ。帝御手ぞ七宝乃印を授玉ふ是ホ上殿下ホ參

烈の人々一斉ホ萬歳を唱各王聘物を献上ある其數無數ホして珎宝名珠金銀綺帛殿上ホ一坐の山を築り淨飯王歡喜斜なりしどこれ〳〵ホ官爵を加ふる大宴を開く緒王緒臣を饗應し玉ふ絨芽出さるる光景なり斯て後ハ太子乃御威位前ホ百條し花顔柳姿乃宮妃五百人風姿端麗乃美女一千人昼夜太子の左右ホ仕奉り系竹乃調歌舞の遊具ぞと云夜々〳〵太子の心を慰ぎ奉り給ども太子ハ却て是を懶ホ玉ふ且夕只烏陀耶ホ書巻を開て古今ホ眼をさらし書合ホ其理を究ホ玉ふ尚良師ホ就て憂ひ玉ひ快そらして楽を玉ふぞ隔雲蒲夫人ハ此体を見て心を痛め玉ひ斯て気色ハ患病を生ぜ只其意を慰ぎ奉ホハ不如して太子乃宮中ホ到り御對面の上仰ぐるハ太子頂日顔色勝玉ふぞ。是宮中ホのみ在て外ホ出玉ふる事なるべし。幸ひ時今春の季なれば盤毘尼苑ホ出遊し艸木乃花紅ホ見御心を慰玉へと練玉ふ太子天性至孝ホ在て母君の御意に背

ゲと敬で領掌ありしを憍曇彌悅ぶひ烏將軍をもて太子蓋見を在はせ
御出遊の旨奏せ之の上園林をもしひ淨め殿宇を莊嚴させ交合勝きこゝろ
女樂五百人を置山海の珍味珎菓備ずといふ事なく准備十分ゆ調ひ烏將
軍月景殿ゆ啓して太子の光駕を促ひ太子八出遊を樂まゝ給ども母公
の仰を背人ゝ成厭烏陀夷をもて數多の近臣兒童を從へ宮殿を囲て城
の東門より出遊しむ之ゆ天上の淨居佛悉達太子の悋樂ゆ愛著し本願を
失忘あゝ人と疑ひ其心を試んとて神通をもて化して老さらぼひ羽となり杖
ゆをゲてよろ〳〵と貧賤男女の太子の行粧を拜見ま中ゆ交り路の傍ゆ停立
ぎろ〳〵と眺居う驚固の官人是を見て大ゆ怒り此老奴何ぞ路頭ゆさまて
太子の御光臨を妨るやと罵り策を拳て喝と驚老翁八強く怒り其代地
上ゆ仆ぶり太子宮輦の内より是を見玉ひ急ゆ官人を制し是八何なる拳
動ぞや猥ゆ人を苦惱しむぞとゝく從者ゆ命じて扶起さしめ偖烏陀

夷ゆ向ひ曰是を何者とうかゝと烏陀夷答て是八老人ゆてゆとゆ太子亦何をか老と
いふやと向ひ曰此人も昔貝嬰兒童蒙ありとも年月停らず皮膚衰へ血肉逐ゆ
枯ぐるる姿となり餘命幾許もなし故ゆ老と申せりと答太子亦問ゆく此人而已
ぞや一切衆生皆如斯なるや曰貴賤とゆ何人か老ゆはざるべき一切衆生皆彼ゆ翁が
如くなりゆと太子此言を聞て歎息しむひ実や日月流邁して時変じ歳移り
老乃至こと電の如し身富貴ゆして轉輪王の位を保とも弓を頼ゆたゝん人世の人何ぞ
う轉変乃世成厭ごとやと頻ゆ感慨乃心を生じ玉ひ厭離の表ひ胸ゆ充て園林ゆ
出遊もべた御意失て烏陀夷を顧て曰く汝俄ゆ心地例ならぬ今日の園遊を止
るべし車を返せと指揮しむ烏陀夷大ゆ驚て是八如何なる御意ゆゆや烏將
軍園林を掃淨し女樂を設て事し光臨を拱待ゆ半途より回り玉ふ事大王國
内乃御意をゆぶりゆ至りゆんと練まれども敢て承引し玉ハざれば烏陀夷已変と
得ぜ官人を以て烏將軍に支乃顛末を告半途より宮輦を回て月景城へ還幸ゆ

しきりなれど烏將軍大いに望を失ひさしよの結構画餅となり手を空して立回りね嬌曇彌夫人八太子の早く還幸あらんを異ひ烏陀夷を迎へ召まし其友を問ふに烏陀夷隱を吏能ありと有り始末を告上嬌曇彌是を安て憂ひ斯て八拇者乃云し如く太子王位を嗣ことを好むなど出家学道乃望あはとこやと安た心もなく淨飯王ハ右乃旨を密奏しむひ倍游樂の具を增厭離の念を止さんと計ひり

淨居佛再試悉達太子

悉達太子八園游の道路老者を見しより頻ハ世をたろをむひ左右ハ侍る美貌乃女官を見ひ御心とする事なく絲竹乃声ハ耳喧くあり呂只机ハ書籍を閲偈を作ひて日を送りひ淨飯王八日ハ官人を召て太子乃行迹を安はくろせむハ東ハ樂をひ休なく晝夜書卷をのみ明てしひ由なれど甚ハ宸襟を惱しむひ何年其心を練り慰ハ王位を讓り辛人と群臣と刈り新ハ城南ハ山を築た萬國乃珍木奇草を集く風流ハ種なし十歩ハ一亭二十歩ハ一樓を建珠玉を鏤た金銀を鏤て花叢を尽し嶺ハ瀧を落し禁ハ流を湛へ山水乃奇観描なせるが如く造営太子乃游覧ハ備ひ其巧已ハ畢れど烏將軍太子ハ謁し假山成就乃由を告光駕を促しまるハ太子も此程引籠ての居むへど外遊を悅ひむひ烏陀夷をすゝめ児童女官を従へ城乃南門より出ひ淨飯王ハ先ハ太子出游の路老者を見ひ樂むなど車を回しむひを思召此度八緒外吏ハ令て太子通行の路上老人病者至乃汚穢不淨の者を固く禁じ拜見の男女十才を限其余八拂ひ除道路を淨め花を捧香を燒しもるし若老人病者不淨の者を在らば灑掃乃外吏罪科し重く刑ずしと勅掟ある是ハ依て諸外吏畏り王命の旨を人民へ觸ひ行幸の道路ハ塵一もあらせず增て老人病者ハ厳ハとり除ひ出ハ淨居佛ハ太子の逸樂ハ著し道心失ひてもやとて其心を試人ひ病者と化して身瘦腹脹ハ肉拮骨露顔色黄瘻呻吟して路乃傍ハ惱み卧蹙固乃官人是を見て大ハに驚た王命厳く前さより老人病者不淨の徒を路上ハ在と

まゝと舘をとゝろかす何ぞ左右に汚穢の者を置るゝと罵り強て急ぎ是を追遣んとゝ太子早く宮輦の内より官人ホを制し熟と見るに已ホ光ホ向たる形相なれど甚だ憐の御心生じ烏陀夷を召て是ハ何者ぞと問ふ烏陀夷答て是病人なり太子亦何故ぞ病者といふやと問ふ曰此者とも壮健なりと雖欲ホ耽り飲食の度なれホ依て四大調ゝず遂ホ病を發し百節疼痛して気力衰五味味ひなく起居安からず手足有と雖自ら動働こと能ハず終ホ死亡するに至りぬと太子宮ひて又問ふ此者一人のみ病あるや一切衆生も皆病あるや答て曰一切人民貴と賤と嗜欲を省ず飲食を慎ざれど皆如斯病を發しぬと答ふ太子宮の歎息し給ひ人間に一大難あり如斯の病者と雖富四天下を保貴と雖輪王と雖も何ぞ特ホ足ん世人此大難を抱ホ何ぞ逸楽ホ荒し飲食を貪り深く怕ひ憂愁胸ホ充て假山遊覧の御心消失烏陀夷を召て今日ハ亦心地煩ハしければ是より還宮せべしと曰烏陀夷大ホ驚れ是ハ如何なる御意ぞや先ホ老人を見ん園林へ到りぬ宮

輦を回されく母君の御心をあなりぬ今日亦病者を見んと御車を回しぬ不孝の罪のがれぬ君深窓ホ在いまず老人病者を見ぬれど御身の汚ること如く思召ども是ハ普く世ホ有ふべき常の事と思召ハ仮山御遊覧あらく御心を慰ぬ是大王の御孝行中くいと練なる太子ハ浄居佛の為ホ厭離の心信深く敢く遊楽を欲しぬれど烏陀夷ハ如く先ホ羊途より回りく憍曇彌夫人の意ホ背て今亦羊途より回りて又大王の睿慮ホ背ぬ実ホ不孝の子ホく罪を謝しまゝん道なりと思及し心なくば御乗引まし〳〵典薬を召て病者ホ医薬を施し給へ假山へ至りぬ烏将軍大ホ悦び半途まで出迎て宮輦ホ隨遂し一百二樓ゝホ御車を止く種々ホ饗應しまつり歌舞吹弾ハ以ゝ更々百般千般の遊楽をなして太子を慰なるぬ太子ハ弥増住者ホ御心とまるぬ女楽美婦ホ目をみぬ口を咲敬花を見て之を紀花落葉の無常を観じ飛泉流水を見ては光陰の移ること猶是よりも速ぬ

と示うたまひ左右して日も稍西に傾たれば烏陀夷を召て還幸を命じ給ふ烏
將軍八王命を奉りて[illegible]尚幾日も御車を留めたまんと種々練られど曾て承引
しむべき袖を拂て寡の御馬に召れ從者に前後を守らせ還幸なり給ふ爰に
淨居佛此時まさに思ふらく已に老人病者と化して太子の心を繫つ今亦死相を示
愈其道心を熾にせん然はあれど衆人に見る事を得せしめず外吏の捍ぎ刑を加
へ無辜を戮さるに至らん不如太子烏陀夷二人のみ見ることを得他の者は見ること
なくしかんに如斯思惟し神通を以て先者となり還幸の道路に横り伏その
躰呼吸已に斷色相悉く土色と變じ[illegible]形相なり然ども緒人の眼には
えざる太子と烏陀夷とのみ眼に遮りぬ太子馬を停て烏陀夷を顧みて是を何
者ぞと問ふ烏陀夷賢なる者なれば胸中に[illegible]已に老人と病者と有て我其然
所以を告太子の御心を煩はしまつられじ此回は不知と申て答なしと思ふに淨居
佛早く其心中を察し神通力を以て烏陀夷が心を放心させ不覺して答をなさ

ひ是に依て太子の再び問ふ時烏陀夷我を忘て是死者なりと答太子さて何
なる何なる死とのたまふや曰く死と謂ひ神去呼吸斷て地水火風の四散五躰
離散する至りの人世に在て五欲を擅にし錢財を貪り積聚して飽知なく無常
然たるべき已に力風の尋に形を解き死路に赴て父母親戚怨み惜ども其甲斐なく
只拂ふ草木の如く不日して朽果ぬなりと申太子宜て亦曰く唯此人のみ然や一切
衆生も皆然や烏陀夷尚神通に屬れ答て曰豈此人のみ限ん乎王侯貴族より
下民卑賤に至るまで一人も死を免る者は[illegible]太子宜て亦曰く御身に冷汗を流し
て曰く世間已に如斯の死苦有て一瞬の間も安心なべきや然に世人何ぞ大苦惱
を抱ずして色食に愛著し放逸の行をのみ好やとして歎息し事止ず怏々として
月景城町を著て憍曇彌夫人に太子假山に出遊しむべき旬日に滯留し御遊
有べしと思召るに只半日にして還幸しむべき心悅ぶべき潛に烏陀夷を召れ太
子假山に出遊しむべき否やを問ふに烏陀夷隱さず能く行幸の路上

病者あつく太子の御心を煩はし給ひ已に還幸あらんと仰せを種々練進ぜし左右して假山へ行幸なり百般の遊戯をなして慰進ぜれども樂まず休息唯ひたすらに早く還幸を促し奉ふ已に使を得て御車を還し給ふ再び路上に死者有て太子を愁しまりんと言上を憍曇弥ぞ死骸盥毘尼苑御遊の路に老者あつく車を還し奉ふ此回は大王の勅掟にて路上に老人病者不浄の者を在せざれと厳に觸させ給ひ何度病者乃至死者を見給ひや是外使の怠なりとて其首王宮へ奏す有れば浄飯王甚だ逆鱗あり外使を召て聽へ召せ官人に命じて罪を糺させ給ふ外使ホロをそろく陳じるは下官に大王の勅命と重んじ厳に老病不浄の者を排除ふ何國よりも忽然と病者出現し給ひぬ然ども何里の者とも知者なし其踪跡もなれども亦還幸の路に死者の在し由は絶て見ざる者也是は跡なく絶奏まくそいろと怕るくやうにぞ官人其首を奏達しける浄飯王紛り給ひ太子の供奉に参て官人を召寄て結

問給ふ外使の首を奏す者に有れば浄飯王心地まことに見ぬ心と天魔破旬の障碍なるべくと外使の罪を恕し給ひ其後群臣と聚會て宣く朕が太子年已に十六才百般の技藝通達せざる事なれども只歓樂の心を傳ぶ且夕書巻をのみ翫び快きなる人自然先年相者が考し如く王位を踐む欲せざる出家学道せん望なるべく朕が血脈茲に絶て慈悲賢王より連綿の世種の天下他人の有となるべし卿等然ば高議して太子の道心を退け王位を嗣ぐべき計策を宣旨ある緒臣勅命を奉りて冠を傾け各慮を回らし所に月光臣位階を進ず臣熟愚意を回らしに太子已に成長し給へども未だ宮妃定まり給ざる是に依て自然御心結ばれ楽まざる出塵の御志も萌ふるべし然ば晋く四天下に佳人を需く宮妃に備へ給へ自然愛憐の御心生じて学道を止まり宝位に即給ぶべし奏もるべ諸卿も此議に賛成し給へと一斉に浄飯王を仰ぐ悦び給ひ然ば諸國の王に命を傳て太子の

新宮ゝ備ゝ給ふ容貌端正の婦女を擇ばと勅掟あるゝより。諸卿あつまと領掌し。
列位王宮を退出したりけり

悉達太子娶耶輸陀羅女

斯く滿朝の群臣王命を奉り。何卒天下第一の美人を擇び太子の新宮ゝ備
屠感ゝ歎ゝと我もと心を盡し。普く諸國ゝ美女を求め都城へ召寄る其
數七百余人ゝ及る。憍曇弥夫人其美女の中ゝ殊ゝ勝れる者を百人擇出し。
其百人の中より又十人を撰ゝ出し。十人の中ゝ二人の佳人をもぐ出し太子の新宮ゝ
備らる。其一人を阿耶摩國王の愛女麁野女と云ひ。今一人を釋種の親族犯杖
と云人の女瞿陀弥女と云り。両女とも無隻の美貌ゝ。梨花の如くなる風姿
海棠の咲出る容貌あり。然も智才勝れ婦女の技藝学究たりと云ふ。
ど淨飯王も憍曇弥も太子の道心を止ん者此両女ゝ限るべしと最も思ひ
給へども太子ハ二女の國色を見給へども曾て心を動ゝ給ざ。畢ハ左右ゝ侍らむへ

とも。夜ハ敢て枕衾を倶ゝ給ざ。麁野瞿陀彌の二妃嬪を召し色戒衒種々
心を竭して。太子の春情を誘ゝ共ゝ更ゝ心を移ゝ給ざれば二妃ハ命りの責ゝ此太子
若男子ゝ非ずハ不在ゝやとて疑ゝ奏ゝ右梵士と云る者淨飯王ゝ奏して曰臣
普く諸道を徑歴して。太子の新宮ゝ備給ふ佳人を尋求ゝ加夷衛國ゝ
一人の王女を見ん。容貌花の如く。肌膚玉茂欺ん声ハ伽陵頻加の如し。然も百般
の技藝ゝ通じ。賢才智慧天下ゝ隻ち。大王聘禮を重ゝ迎とり太子の
新宮ゝ其王女ゝ必ず寵愛して出塵の念を斷ゝ給ふべしと申ゝ淨飯王聞感
あり。即ち右梵士を勅使として加夷衛國王の許へ到り聘礼を厚ゝ婚儀
を求ゝ給ふ。彼國王敬ゝ勅使を結び拜伏して曰大國の皇帝ゝ國の寡人ゝ
早く小姐を父ゝ白王太子の灑掃ゝ備ゝ給ふの宣旨國の大事何ぞ是ゝ過ん
ゝ侍ん。倆ゝ小姐ゝ意を不知ゝ王命を統ゝ世可否を定ゝ後勅答しん
小時待せ給へと。客殿ゝ結ゝ入官人を父ゝ重ゝ饗應さる。其身ハ後宮ゝ

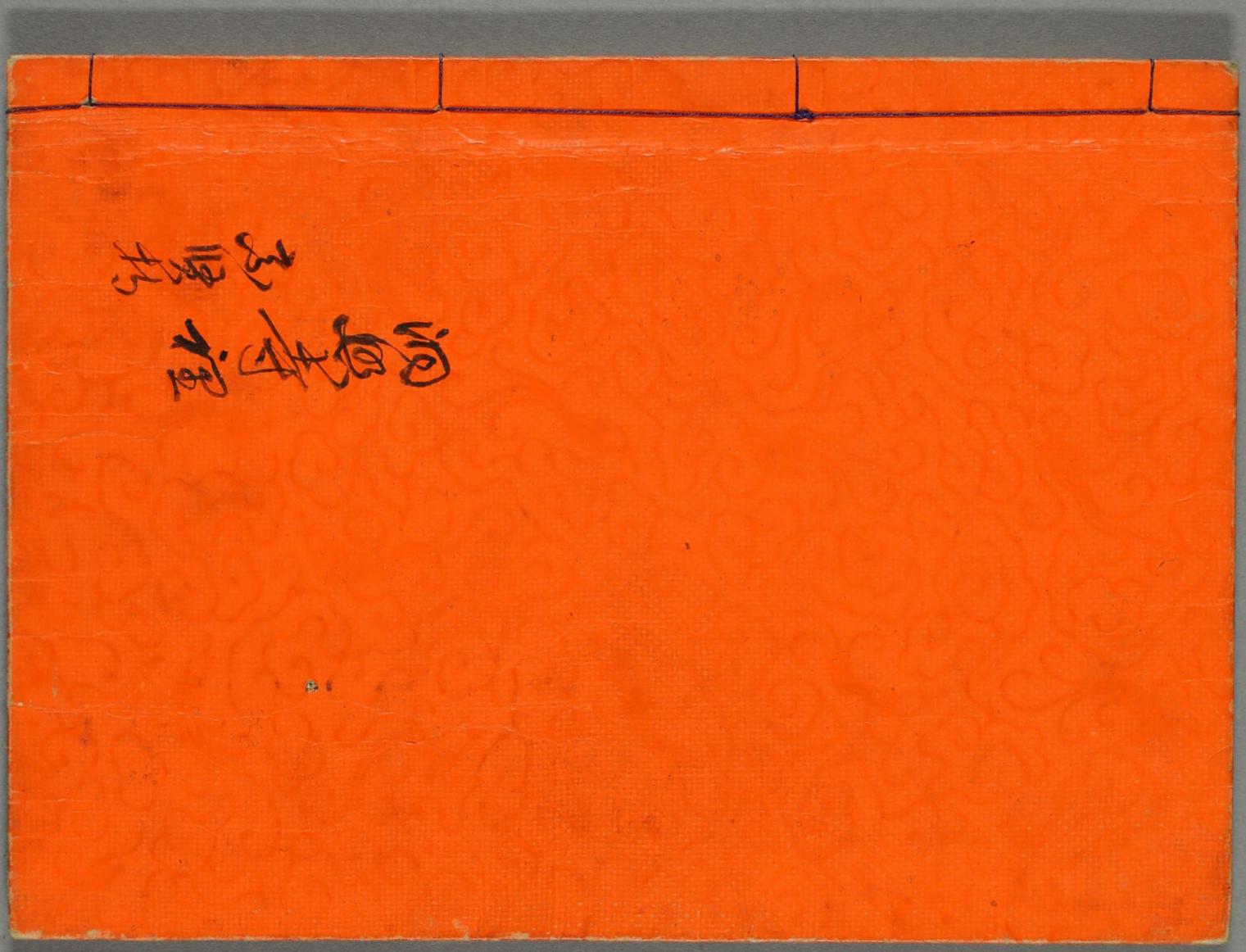
入愛女耶輸陀羅女ヲ對ス。ル河陀國ノ淨飯王其太子ノ為ヲ娶ント求知
汝肯ヒ乎ヤ不ヤ。ト問耶輸陀羅女欣然ト答テ曰傳ヘ聞ク伽陀國王ノ太子。降誕ノ
時三十四ノ奇特瑞應アリ。成長シテ天文地理等數ヘ百般ノ藝不学ナシテ通達
シ。ヒトヘニ是ハ五天竺ノ一人ノ聖主ナリ。速ヤカニ婚儀ヲ結ブヘシトイフ。又王ノ曰是マテ隣
國ノ王各太子ノ為ヲ汝ヲ娶ント使者ヲ遣シ。越者都テ八國。然ルトモ汝悉ク承引
セ。然ルヲ今遠ク伽陀國王ト婚儀ヲ結ヒテ。恐クハ隣國ノ王怒テ兵馬ヲ發シ
攻来ル。此難ヲ奈何トセン。耶輸陀羅女ノ曰是憂ルヲ不足。悉達太子ヲ請ヒ
隣國ノ王ヲ觸ル。悉達太子ト諸般ノ藝ヲ競ヒ勝ン人ヲ小姐ヲ娶ル。ト
云セ。然ル人國ノ太子悉ク聚リ来ラン。而テ悉達太子ト技藝ヲ闘シ。勝ル。必定
八國ノ太子勝ラン。ト能ハ。自恥テ國ヘ回ル。其上ノ伽陀國ト親ヲ結ヒ。敢
テ恨ヲ懐者ハ無シ。ト云ヘ。又王手ヲ拍テ大ヒニ感シ。我ガ女統得ル好ヒテ即チ
客殿ニ到リ。右梵士ニ對面シ。右ノ一五一十ヲ統ヒ一遍ヲ。右梵士ニ云テ是何ト

安ンヌル。別ヲ告ル。本國ヘ立回リ。淨飯王ニ謁シ。有シ。顛末ヲ回奏シ。ヒレヲ。此義
如何ヤ。ト思ヘ。ト。先太子ヲ召ス。伽夷衛國王ノ云シ。扨ノ。ヒレヲ告ル。ニ太
子何ト。思召ス。一議ニ及ヒ。承引シ。是ニ依テ淨飯王十萬ノ四兵ヲ發シ
て太子ヲ伽夷衛國ヲ迎ヒ。此旨豫テ。ヒヘ。彼國王遠ク迎接
シ。城中ヘ請ジ。初テ太子ノ相貌ヲ見ルニ三十二相具足シ。光輝ヒ。ヒ。ヒ。大ニ
歓喜シ。耶輸陀羅女ヲ呼出テ太子ヲ拜セム。耶輸陀羅女一度太子ノ玉貌
ヲ見ル。ヒ。眼瞬ヒ。太子モ此女ヲ見ル。笑ヲ造リ。ヒ。把ル。珊瑚ノ笏ヲ女ニ
賜ヒ。妃敬ヒ是ヲ受。妾ハ只君ノ德ヲ慕ヒ。敢テ宝ヲ貪リ。ヒ。ヒ。ヒ
る。太子其紀ヲ。ヒ。婦德ヲ感シ。國王ハ城外ニ方四十里ノ鄽ヲ構ヒ鐘ヲ
鳴シ。鼓ヲ拍ル。國中ニ響シ。維摩ニモ我ガ小姐ト婚ヲ結ン。ト欲スル者八十日ノ
後此場ニ来ル。藝術ヲ闘セ。技ノ勝ル者ヲ女婿ト。ヒ。ヒ。ヒ。解シ。隣
國ノ王傳ヒ。各數萬ノ兵ヲ。ヒ。太子ヲ。ヒ。伽夷衛國ノ都城ニ聚ル者

悉達太子迦夷衛國ゟ
達婆太子と
馬術を
競ひ
之圖

都く八國其勢數十萬人思ひ〻ふ屯を取く扣り。猩々く其日ゐも成れど
國王八耶輸陀羅女を牽て緒臣と俱ふ高樓ふ昇く其勝劣を望ける。時
ふ東ノ門を開り せく悉達太子羅穀錦繡ノ裝を飾り烏芝麦を始め
數妻ノ近臣を従へ従容として廓ふ入るふ。ぱく西ノ門を開く私良広國の皇子
達婆太子衣壮裝花蘂を畫く紆妻の臣下を従へ入乗り。馬術を競んこと玆
望り悉妻太子是を諾ゐ官人頓く二領の駿馬を牽出し両太子ふと子
玆ふ於く東西角く馬上ふ跨り乗出し〻ふ悉達太子手綱をうへり左右
前後ふ乗回り。其進退ノ疾こと電光のごく去と見とむる吏能ハざれど
達婆太子大ひふ慌鞍踏ゑ〻く馬上より逆ふ落々。是依く東方ノ官人
鼓を拍く悉達太子の勝を報じ。達婆太子ハ赤面く退て出次ハ仙妻良國
ノ皇子能光太子衆人を牽く場ふ入筋力を競ん吏を望と自大盤石を採
く手球ノ如く弄て少時場中を回りるゑ一声高く叫び悉達太子ノ頭上

を臨ぐ投げ給ふ。太子徐ふ右の手玆ゆく受留天を望ぐ投上ゆふ。盤石鳴響て
空裏ふ昇り。霹靂の如く響光太子ゑ頭上ハ墜下る。能光其勢ひふ辟易。身を
翻し〻く狩の外ハ迸退かう其次ふハ屋破利國ノ皇子静観太子場ふ入常數
を問答せ人吏を望。擡木藥草衆水滴數或ハ日月星辰ノ度數ハ天門地理
八萬ノ異術ふ至る迄是を問ふ悉達太子一々是を年じゆ事治をりて流水の如く
一言半句も滞り ゆなれ。静観及ぐて引退く。其次ハ阿蓍耶屋國ノ堅立太
子場ふ入射藝を闘さ人吏を望む。是ふ依く官人三百歩ふ鉄鼓を竪さ〻的こと
其數十鼓かり。堅立先弓を弾絃く是を射るふ五ノ鉄鼓を射貫こと。其時悉
達太子徐ふ立ち玉ひ弓を執〻絃弾し玉ふ。其弦ふ甚ぐ弱ク名れむ五弓まぐ事所
玉ひ別ふ強弓を需玉ハ國王宝藏より黄金ノ弓を取出さ世太子ふ授ケて曰
此宝弓古より納貯といへども無隻ノ強弓ハ名れむ敢て用る者ハ。太子試ふ弓ふ
とゝきれ名ぐ即ち執く弦弾し是より丸が心ふ合りく。鉄箭を採て弓ふ番へ

満月の如く弦を引て的中し。十數を悉く射貫き是を見て
堅き太子其及むべきに嘶閑口を引退く。其余小國の太子書画管絃の
諸藝を競ふ。一人も悉く達太子に勝る者なくして各慚愧して從軍を引其國々へ
を回りける迦夷羅國王八大に悦び太子を大殿に結て酒宴を催して重く餐應
し。婚儀を約して五萬の軍馬を以て迦陀國へ送りける。淨飯王八太子八國の
皇子と技術を闘ひ。婚姻を約して回むりとせむひく。歡喜に勝むべき太子如斯諸
皇子と爭て新宮を娶ハ必ず其意に合しめるなり。出璧乃ち自然に止る。ことて珠宝
結帛數を盡く聘礼を享し。迦夷羅國に勅使を立て車千乘を以て耶輸陀羅女
を迎へ。月景城の裡に新宮を造営し。博士に命て吉日良辰を卜せ亀鶴の婚姻
を取結せむひとり是に依て淨飯王憍曇弥夫人年来憂愁乃ち皆を安人ぐ。満
朝の月卿雲客そして民間乃末までも皆萬歳を唱へ悦勇まざるといふ者なし

釋迦御一代圖巻之二畢